

研 究 紀 要

第 20 号



令和 6 年 3 月

鹿児島県立青少年研修センター

《 目 次 》

はじめに	1
I 研究の経緯	2
1 過去の研究主題	
2 令和4年度の研究	
II 本年度の研究について	3
1 社会的背景と課題	
2 研究主題	
(1) 研究主題設定の理由	4
(2) 研究の目的	
(3) 研究の内容	5
3 研究の実際	
(1) 研究組織	
(2) 研究計画	
(3) 集団宿泊学習における体験活動の有用性についての検証	7
(4) 集団宿泊学習実施校のIKR調査から	
(5) 教科と関連付けた活動プログラムを活用した活動プログラムの検証	19
(6) 主催事業における「体験活動」と「生きる力」の関連性の検証	21
4 研究のまとめ	45
III スキルアップ研修	47
1 本センターの職員の現状と課題	
2 スキルアップ研修の必要性	
3 スキルアップ研修の実施内容	
4 スキルアップ研修の実際	48
5 スキルアップ研修を終えて	61
参考（主催事業報告）	62
おわりに	74

はじめに

令和5年度もコロナ禍という社会状況が昨年度からの影響が大きく、しかし5月には感染症法上の位置づけが5類感染症に変更されることとなり、明るい兆しも見え始めてきていると感じます。

本センターでも、基本的な感染症対策を継続しながら、コロナ禍以前と同様の日常へと移行してきました。利用団体も、社会の動きに合わせて変化していくことが予想されました。結果として利用団体数も上昇し、活動の形態も以前のように野外活動を主体としたものが増加しました。この傾向は、次年度に向け、活動日数の増加やプログラム活動の内容にも肯定的な変化と捉えています。

さて、発展する情報化社会の中で、バーチャルな世界を通した間接的な体験が増加しており、自然や生活文化等とふれあう直接体験が減少する傾向にあると言われていています。青少年社会教育施設は、集団宿泊活動や野外活動など、家庭や学校では得がたい体験活動を子供たちに提供している施設です。ここでの体験活動は人づくりの原点であり、自己肯定感や協調性などを育みます。本センターでは、本年度のプロジェクト研究として、「学校と連携・協働した体験活動の在り方Ⅱ～IKR調査の分析結果を活用した事業の工夫・改善～」というテーマを設定し、研究実践を重ねてきました。その中で、より多くの学校にIKR調査への協力をいただき、宿泊学習実施形態別における「生きる力」の変容の度合いを調査分析するとともに野外での体験活動を充実させることで、効果的な宿泊学習の在り方についての検証を試みました。

また、昨年度までに作成した「教科と関連付けた活動プログラム」の試行も行い、その効果と課題について確認することができました。改善の視点を明確にしたことで、集団宿泊学習のより一層効果的な実施につながり、学校と一体となって児童生徒の健全な育成に貢献できるのではないかと期待しているところです。これらの取組は、今後の現代的な課題を解決する実践であるとともに、児童生徒一人一人が自らの課題を乗り越えつつ、他者と協働して成し遂げる力を育む有効な機会となると考えています。

最後になりますが、本研究を進めるにあたり、資料提供やアンケート調査に御協力を賜りました関係機関の皆様方に心から感謝を申し上げますとともに、不十分な点や御教示いただけたところをございましたら御指導、御鞭撻を賜りますよう、よろしくお願いいたします。

令和6年3月

鹿児島県立青少年研修センター
所 長 福岡 幸彦

I 研究の経緯

1 過去の研究主題

平成 27～29 年度「『生きる力』を育む体験活動プログラムの開発」

平成 30～令和元年度「主体的・対話的で深い学びを育む体験活動プログラムの創造」

令和 2 年～3 年度「学校と連携・協働した体験活動の在り方Ⅰ～教育課程への位置付けをめざして～」

令和 4 年～「学校と連携・協働した体験活動の在り方Ⅱ～IKR 調査の分析結果を活用した学校へのアプローチ～」

令和 5 年～「学校と連携・協働した体験活動の在り方Ⅱ～IKR 調査の分析結果を活用した事業の工夫・改善～」

2 令和 4 年度の研究

令和 4 年度のプロジェクト研究としては、令和 2 年～3 年度の研究主題「学校と連携・協働した体験活動の在り方Ⅰ」を受け、より青少年社会教育施設と学校教育の連携を密に図ることを目的に研修主題を設定し、IKR 調査の分析結果を活用して、特に学校へのアプローチを目指して研究してきた。その方策として、体験活動の必要性や意義、体験を重ねることの効果や重要性を検証していくために、本センターで行われる集団宿泊学習実施校に対し、体験活動の有用性について、児童生徒の「生きる力」を測定するアンケート調査「IKR 調査(注1)」を抽出校に行い研究した。その結果、集団宿泊学習の事前調査と事後調査を比較すると、質問項目によっては値の下がる学校もあったが、「心理的社会的能力」「徳育的能力」「身体的能力」の3つの能力ごとにまとめて比較すると全ての学校のポイントが向上していた。それに伴い、全ての学校において「生きる力」のポイントが向上しており、平均で 5.8 ポイントの向上があった。各能力において、ポイントの向上が最も高かった項目については、「心理的社会的能力」は、「判断視野／先を見通して、自分で計画が立てられる」が、0.39 ポイント向上。「徳育的能力」については、「まじめ勤勉／いやがらずに、よく働く」と「自己規制／自分かつてな、わがままを言わない」が共に、0.22 ポイント向上。「身体的能力」については、「日常的行動力／早寝早起きである」が、0.51 ポイントの向上であった。このことから、「生きる力」の変容について概要はつかめたものの、活動プログラムである野外活動の種類等の違いによる、より具体的な変容の要因を検証するまでには至らなかった。

また、令和 2 年度から、体験活動の充実、多様な体験活動の機会の確保を図りやすくすることを目的に、教科と関連付けた活動プログラムとして 12 の単元指導案を作成し、学校と連携しながら、この単元指導案に基づく活動プログラムの展開、検証を行った。

さらに、本センター主催事業における「体験活動」と「生きる力」の関連性についても、プログラム構築におけるコンセプトを明確にしながら企画・立案、実施し、事前から事後の児童生徒の変容について検証してきた。

一方で、新型コロナウイルス感染症が感染症 5 類に引き下げられたものの、集団宿泊学習の実施形態が戻りつつあるとはいいがたい状況が続いており、

その教育的目的や効果を十分に達成するために、学校も苦慮している様子が見えてきた。

(注1) 橘直隆氏(筑波大学大学院人間総合科学研究科教授)と平野吉直氏(信州大学教育学部教授)が開発した「生きる力」を測定するためのアンケート調査

Ⅱ 本年度の研究について

本年度の「プロジェクト研究」においては、まず、集団宿泊学習実施校に対するIKR調査の実施数を更に増やすこととした。これにより、データの信憑性を向上させながら、宿泊学習実施形態別、野外活動におけるプログラム活動別における「生きる力」の変容の度合いを様々な形態で検証できるのではないかと考えた。併せて、本センター主催事業における研究、検証も継続することとした。

また、学校と連携を図りながら、教科と関連付けた活動プログラム、単元指導案の展開、検証を継続することで、今後の学校との連携の必要性を明確にすることをすることとした。

さらに、本センター職員としての専門性、資質向上を図るために、年間を通して「スキルアップ研修」を位置付け、必要なスキルを身に付ける研修を継続的にすることとした。

1 社会的背景と課題

現代社会において、子供たちを取り巻く環境は、めまぐるしく変化しており、様々な社会的背景から課題が捉えられている。そこで、本センターでは、以下の5つを課題として捉えた。

ア 生活様式の多様化

【課題】 「遊びのバーチャル化」「家庭での役割の減少」など、自然体験や生活体験等の直接体験の機会が不足・減少している。

イ 生活環境の変化と身体を動かす時間の減少

【課題】 「歩く」「走る」「声を出す」等の機会の減少による基礎的な体力の低下、運動能力が十分発達していない。

ウ 地域社会との関わりの変化と集団活動の減少(「集団」から「個＝孤」へ)

【課題】 「地域での活動や外での遊び」の減少など、対人関係が希薄になり異年齢や異世代との交流の機会が少ない。

エ 若者の社会的自立の遅れ

【課題】 学習意欲や勤労意欲が低く、コミュニケーション能力が低下している。

オ 家庭の教育力の低下

【課題】 「早寝、早起きをする」「あいさつをする」「規則正しい生活をする」などの基本的な生活習慣が身に付いていない。

2 研究主題

学校と連携・協働した体験活動の在り方 Ⅱ
～IKR調査の分析結果を活用した事業の工夫・改善～

(1) 研究主題設定の理由

青少年社会教育施設等で行われる自然体験活動は、学校や家庭では得られない貴重な体験となりうる。この活動は、参加する子供たちに新たな視点や技術を提供し、現実世界での学びを促進させると考えられている。

実践的な経験を通じて学ぶ機会となる自然体験活動は、教室内の学習では理論的な知識を積み重ねる学習となることと異なり、屋外でその知識を実践に移し、深化させることができる。また、学び合いや育ち合いの相乗効果から「生きる力」の高揚に繋がるとされている。

学習指導要領においては、「よりよい学校教育を通じてよりよい社会を創る」という目標を学校と社会とが共有し、それぞれの学校において、必要な教育内容をどのように学び、どのような資質・能力を身に付けられるようにするかを明確にしながら、社会との連携・協働によりその実現を図っていく」としていることから、青少年社会教育施設は学校と連携を密に図っていく必要がある。

しかし、近年、コロナ禍の影響で、学校を取り巻く環境は様変わりした。集団宿泊学習をはじめとする学校の本センター利用も、規模や形態を変更したり、利用自体を控えたりするなどの傾向が続いてきた。そこで、今一度、青少年社会教育施設における集団宿泊学習の有用性について検証し、体験活動の教育的効果について実証していくことの意義は大きいと考えた。

また、学校にとって集団宿泊学習を展開しやすくするとともに、本センターの利活用を図るための手立てとして、令和2年度から研究を進めてきた教科等に関連付けさせる取組を継続することで、より充実したカリキュラムマネジメントが構築できるのではないかと考え、研究を進めることとした。

(2) 研究の目的

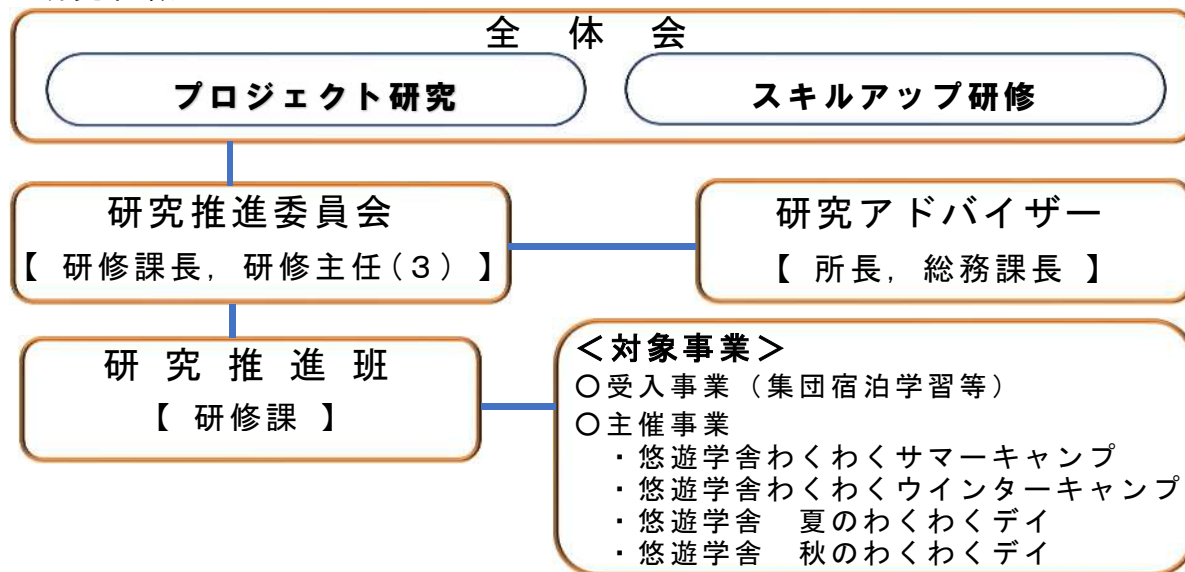
現行の学習指導要領では、「主体的・対話的で深い学びの実現」をキーワードとしている。「自ら考え、学び、行動することを促し、他者との対話や協働を通じて深い学びを実現することを目指している。従来の教育における単なる知識の受容ではなく、子供たちの主体性を重視し、自身の興味や関心に基づいて学びを深めることが自らの『生きる力』となる。」という願いがある。これまでの学習指導要領で大切にされてきた子供たちに「生きる力」を育む、という目標は継続され、社会の変化を自分自身で捉え、新たな学びと表現を目指すとしている。お互いを尊重し、共に学び合い、共生する学校社会の構築を目指している。これにより、違いを認め合いながら、お互いに理解し合う社会を形成し、社会全体での共感や連帯に繋げる。同時に社会に出ても学んだことを生かせるよう、本センターでの体験活動を通じた学びによる「生きる力」の変容や、教科と関連付けた活動プログラムの有用性などを検証することで、学校と連携・協働したカリキュラムの構築がなされ、青少年社会教育施設を活用することによる教育的効果や教科等の時数確保につなげることができる。

(3) 研究の内容

- ア 集団宿泊学習における体験活動等の有用性について、I K R 調査を実施し、児童生徒の「生きる力」の変容を検証する。
- イ 集団宿泊学習において、教科と関連付けた活動プログラムの単元指導案に基づいて活動プログラムを展開し、検証する。
- ウ 主催事業（悠遊学舎シリーズ）において、「体験活動」と「生きる力」の関連性を検証する。

3 研究の実際

(1) 研究組織



(2) 研究計画

ア 研究推進のための会議等

(ア) プロジェクト研究会議（毎月第4週を基本とする）

(イ) 研究推進委員会（主任会，臨時会議）

〔プロジェクト研究計画〕

期 日	領 域	研修内容
4	4 プロジェクト研究 課内業務研修	・本年度の研修の進め方について：1 班主任 ・職員マニュアル読み合わせ(1 研修指導心得 P1～5)
	24 プロジェクト研究 課内業務研修	・本年度の研修の進め方について：1 班主任 ・職員マニュアル読み合わせ(2 研修指導法 P6～21)
5	26 プロジェクト研究 課内業務研修	・本年度のプロジェクト研究の進め方と組織，分担等：1 班主任 ・新規主催事業について，主催事業の報告の仕方について：2 班主任 ・新規プログラムについて：3 班主任
6	23 プロジェクト研究 課内業務研修	・I K R 調査について：1 班主任 ・新規プログラム，新規主催事業について：2，3 班主任
7	18 プロジェクト研究 課内業務研修	・単元指導案の利用について：1 班主任 ・新規プログラムについて：3 班主任

			・その他（集団宿泊等の課題と対策，主催事業について：各係）
8	30	プロジェクト研究 課内業務研修	・研修のまとめ，主催事業のまとめについて：各班より ・次年度新規プログラム検討：各班の各係より
9	19	プロジェクト研究 課内業務研修	・テーマ研修について：1 班主任 ・新規主催事業，新規プログラムについて：2，3 班主任
10	16	プロジェクト研究 課内業務研修	・テーマ研修について：1 班主任 ・新規主催事業，新規プログラムについて：2，3 班主任
11	11	課内業務研修	・次年度主催事業について：2 班主任
11	14	課内業務研修	・次年度主催事業について：2 班主任
12	8	プロジェクト研究 課内業務研修	・研究紀要について：1 班主任 ・マニュアル見直しについて：1 班 ・次年度主催事業について：2 班主任
12	20	プロジェクト研究 課内業務研修	・研究紀要について：1 班主任 ・次年度主催事業，新規プログラムについて：2，3 班主任
1	19	課内業務研修	・新規プログラムについて：3 班主任
1	24	プロジェクト研究	・次年度研究内容について（アンケート集計等を基に）：1 班主任 ・研究紀要の校正分担：1 班主任
2	5	課内業務研修	・次年度主催事業について
2	21	プロジェクト研究	・次年度の研修の進め方について①
3	15	プロジェクト研究	・次年度の研修の進め方について②

イ 受入事業

集団宿泊学習実施校の児童生徒を対象に I K R 調査を行い，集団宿学習の有用性を検証するとともに，集団宿泊学習等の活動プログラムにおいて，単元指導案をもとにプログラムを展開し，検証する。

ウ 主催事業

体験活動の効果などを，それぞれの主催事業で検証していく。「悠遊学舎シリーズ」においては，I K R 調査を行い「生きる力」の変容を検証する。

月	事業名	中心となる体験活動プログラム
4	たけのこホリデイ①	たけのこ掘りと調理
	たけのこホリデイ②	たけのこ掘り
5	ファミリーデイキャンプ春物語	自然体験活動
6	悠遊学舎 夏のわくわくデイ	クラフト活動，調理，自然体験活動
7	夏休み親子工作教室	クラフト活動

8	悠遊学舎わくわくサマーキャンプ	野外炊事, テント設営・撤収, 自然体験活動, クラフト活動
	ファミリーデイキャンプ夏物語	野外炊事, テント設営・撤収
	夏の星空観望会	星や星座の学習
	社会教育セミナー	【中止】
9	青少研観月会	月や星の学習
10	ファミリーキャンプ秋物語	野外炊事, テント設営・撤収
	青少研オータムデイ	クラフト活動, 自然体験活動
11	悠遊学舎 秋のわくわくデイ	クラフト活動, 調理, 自然体験活動
12	自然素材で作るクリスマスリース・ミニツリー	自然素材収集, リースづくり
	冬の星空観望会	【中止】
	悠遊学舎わくわくウインターキャンプ	野外炊事, テント設営・撤収, 自然体験活動, クラフト活動
1	ファミリーキャンプ冬物語	野外炊事, テント設営・撤収
2	青少研がやってきた	創作体験活動, 作品展示, 施設紹介
通年	青少研ほっとスペース	野外活動, クラフト活動等 (希望する活動を通年で展開)

IKR調査(簡易版) とは

28 項目の質問(6 段階評価)から, 「心理的社会的能力」・「徳育的能力」・「身体的能力」の 3 つの能力で「生きる力」を数値化し, 測定・分析するものである。

(4) 集団宿泊学習実施校の IKR 調査から

《令和 5 年度 集団宿泊学習において IKR 調査を実施した 36 校の変容》

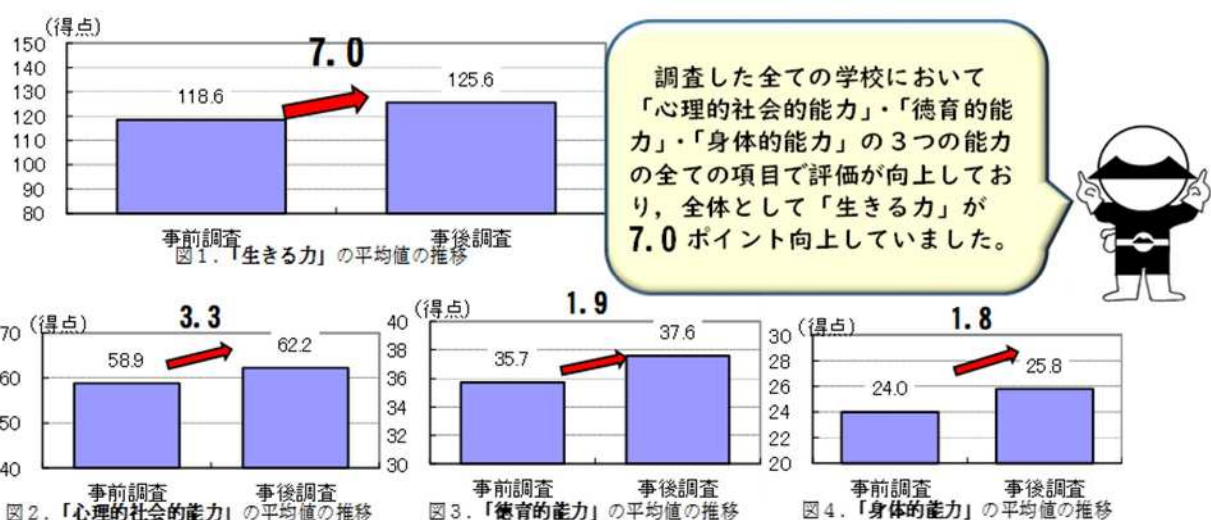
【小学校 19 校 : 1, 635 人, 中学校 17 校 : 2, 882 人 計 4, 517 人】

能力		調査項目	事前調査		事後調査	
			M	SD	M	SD
生きる力			118.6	22.7	125.6	25.0
心理的社会的能力			58.9	12.3	62.2	13.3
	非依存	1. いやなことは、いやとはっきり言える	4.2	1.3	4.6	1.3
		15. 小さな失敗をおそれない	4.1	1.5	4.4	1.4
	積極性	11. 自分からすすんで何でもやる	4.2	1.2	4.5	1.2
		25. 前向きに、物事を考えられる	4.2	1.3	4.4	1.3
	明朗性	5. だれにでも話しかけることができる	4.4	1.4	4.7	1.3
		19. 失敗しても、立ち直るのがはやい	4.1	1.5	4.3	1.5
	交友・協調	7. 多くの人に好かれている	3.5	1.3	3.6	1.4
		21. だれとでも仲よくできる	4.6	1.4	4.7	1.3
	現実肯定	9. 自分のことが大好きである	3.6	1.6	3.8	1.6
		23. だれにでも、あいさつができる	5.0	1.2	5.1	1.1
	視野・判断	3. 先を見通して、自分で計画が立てられる	3.9	1.3	4.3	1.3
		17. 自分で問題点や課題を見つけることができる	4.2	1.3	4.4	1.3
	適応行動	8. 人の話をきちんと聞くことができる	4.7	1.2	4.8	1.1
		22. その場にふさわしい行動ができる	4.3	1.2	4.6	1.2
徳育的能力			35.7	7.0	37.6	7.4
	自己規制	14. 自分かつてな、わがままを言わない	4.2	1.3	4.5	1.3
		28. お金やモノのむだ使いをしない	4.4	1.5	4.6	1.4
	自然への関心	6. 花や風景などの美しいものに、感動できる	4.3	1.4	4.6	1.4
		20. 季節の変化を感じることができる	4.6	1.3	4.8	1.3
	まじめ勤勉	12. いやがらずに、よく働く	4.2	1.3	4.5	1.3
		26. 自分に割り当てられた仕事は、しっかりとやる	4.9	1.1	5.0	1.1
	思いやり	2. 人のために何かをしてあげるのが好きだ	4.6	1.2	4.8	1.2
		16. 人の心の痛みがわかる	4.5	1.3	4.8	1.3
身体的能力			24.0	6.0	25.8	6.3
	日常的行動力	13. 早寝早起きである	3.8	1.6	4.3	1.5
		27. からだを動かしても、疲れにくい	3.9	1.6	4.2	1.5
	身体的耐性	4. 暑さや寒さに、まけない	4.0	1.5	4.3	1.5
		18. とても痛いケガをしても、がまんできる	4.3	1.5	4.5	1.4
	野外技能・生活	10. ナイフ・包丁などの刃物を、上手に使える	4.2	1.5	4.5	1.5
		24. 洗濯機がなくても、手で洗濯できる	3.8	1.6	4.1	1.6

ア 全調査まとめ

調査結果

令和5年度の集団宿泊学習においてIKR調査を実施した36校の「生きる力」の変容（対象：児童生徒4517人）



各項目で「とてもあてはまる」を6点、「まったくあてはまらない」を1点としてそれぞれ1点刻みで得点化し、項目ごとに平均点（M）及び標準偏差（SD）を算出

事前調査と事後評価を比較すると、「生きる力」の平均値が、7.0 ポイント向上していた。

3つの能力「心理的社会的能力」については、3.3 ポイント向上しており、その向上に有意差が見られた。これは、泊数や宿泊形態、経験したプログラム内容に違いはあるものの、集団宿泊学習という、家庭生活から離れ、自然の中で体験活動等に協力しながら取り組んだという経験が影響していると考ええる。これは、家庭、学校生活とは違う環境で仲間と寝食をするために、より多くの仲間とのコミュニケーションが必要になった上、準備から片付けまで自ら行わなければならない、普段の生活以上に「生きる力」が求められたことが心理的にも社会的にも影響したと考える。

次に、「徳育的能力」については、1.9 ポイント向上しており、その向上に有意差が見られた。これも、「心理的社会的能力」と同じく、集団宿泊学習が、道徳的な諸価値の変容につながったと考える。1泊2日、2泊3日という短い期間であるため、生活習慣の確立、人間関係能力の育成や規範意識の醸成等が図られ、自然への親しみや美しいものに感動することができたとは言い難い。

しかし、集団宿泊学習のねらいを達成するためには、他者への思いやりの心をもつことや積極的に行動するという実践力が必要であり、本センターでも「やさしさのリレー」を意識付けしている。このような活動等を積み重ねる中で、気づき、考えながら行動できたことで、自らの成長を感じられたことが影響したと考える。

最後に「身体的能力」については、1.8 ポイント向上しており、その向上にも有意差が見られた。これも、「心理的社会的能力」と同じく、集団宿泊学習における生活体験や自然体験が変容につながったと考える。決められた生活時間の中で活動しなければならいことや、本センターの約束事として、「10分前行動5分前集合」があり、規則正しい生活に繋がったことや各種野外活動・自然観察において、安全に気を配りながら仲間と協力し、身体を動かしたことが、家庭生活とは大きく違う、不便な生活を経験したことが影響したと考える。

以下については、「心理的社会的能力」「徳育的能力」「身体的能力」の3つの能力に対し、それを細分化した調査項目の中から、変容の見られた上位3項目である。

〔心理的社会的能力〕

	下位能力	調 査 項 目	向上ポイント
1	視 野 判 断	先を見通して、自分で計画が立てられる	0.42
2	非 依 存	いやなことは、いやとはっきり言える	0.34
3	非 依 存	小さな失敗をおそれない	0.31

〔徳育的能力〕

	下位能力	調 査 項 目	向上ポイント
1	まじめ勤勉	いやがらずに、よく働く	0.33

1	自己規制	自分かってな,わがままを言わない	0.29
3	自然への関心	花や風景などの美しいものに,感動できる	0.28

〔身体的能力〕

	下位能力	調査項目	向上ポイント
1	日常的行動力	早寝早起きである	0.50
2	身体的耐性	暑さや,寒さに負けない	0.37
3	野外技能・生活	ナイフ・包丁などの刃物を,上手に使える	0.29

3つの能力について,「心理的社会的能力」では,「視野判断／先を見通して,自分で計画が立てられる」が0.42ポイント向上し,「徳育的能力」では,「まじめ勤勉／いやがらずに,よく働く」が0.33ポイント向上。「身体的能力」では,「日常的行動力／早寝早起きである」が0.50ポイント向上していた。要因としては集団宿泊学習において,目的やねらいに応じた活動プログラムを構成し展開させたり集団生活をさせたりすることで向上が図られていると考える。

新型コロナウイルス感染症の影響は今年度の5月より感染症5類に引き下げられたものの,集団宿泊学習の実施時期や学校規模等によっては,その実施形態及びプログラム活動を一部見直したり,他校との交流を控えたりするなどの影響が少なからずあった。一方で,過去3年間に比べ,中止する学校が減り,コロナ渦前の状況に戻ろうとする動きも感じられた。ねらいを達成するために,児童生徒の実態等を考慮しながら,より充実した活動プログラム等を調整・計画して,実施できたことも影響していると考ええる。

イ 実施形態別調査から
(7) 校種別

校種別 1

小学校：17校 計17校 5月～11月実施

○ 校種別人数

校 種	人 数	合 計
小学校	1 6 3 5	1 6 3 5

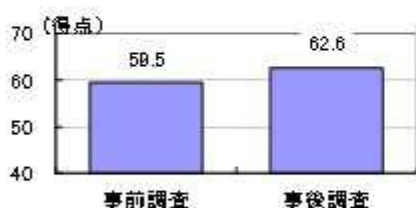
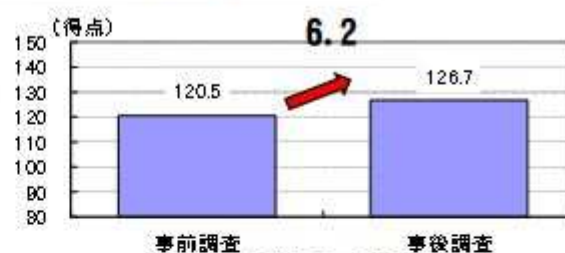


図2. 「心理的社会的能力」の平均値の推移

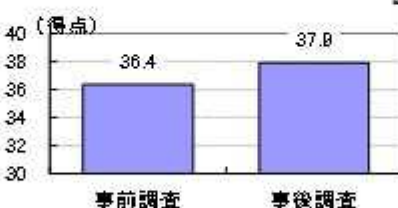


図3. 「徳育的能力」の平均値の推移

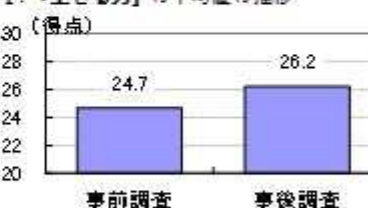


図4. 「身体的能力」の平均値の推移

【 3つの能力の中で特に得点が大きく向上した項目 】

視野・判断 先を見通して、自分で計画が立てられる (心理的社会的能力: 0.5 ポイント向上 ♪)

まじめ 勤勉 いやがらずに、よく働く (徳育的能力: 0.3 ポイント向上 ♪)

日常的行動力 早寝早起きである (身体的能力: 0.5 ポイント向上 ♪)

校種別 2

中学校：17校 計17校 5月～11月実施

○ 校種別人数

校 種	人 数	合 計
中学校	2 8 8 2	2 8 8 2

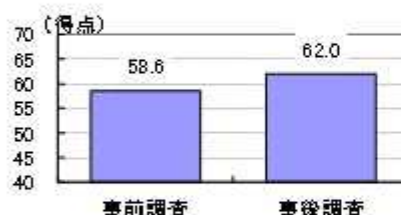
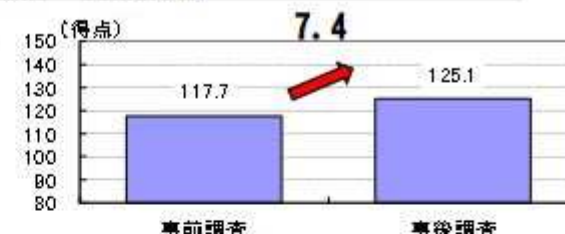


図2. 「心理的社会的能力」の平均値の推移

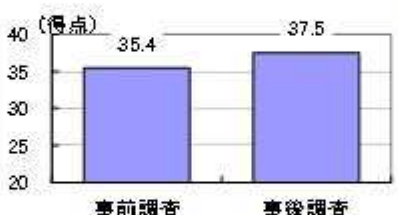


図3. 「徳育的能力」の平均値の推移

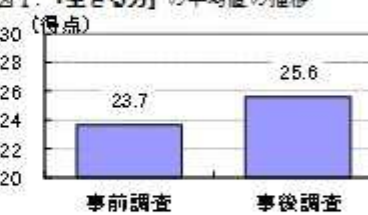


図4. 「身体的能力」の平均値の推移

【 3つの能力の中で特に得点が大きく向上した項目 】

積極性 自分からすすんで何でもやる (心理的社会的能力: 0.4 ポイント向上 ♪)

視野・判断 先を見通して、自分で計画が立てられる (心理的社会的能力: 0.4 ポイント向上 ♪)

思いやり いやがらずに、よく働く (徳育能力: 0.4 ポイント向上 ♪)

日常的行動力 早寝早起きである (身体的能力: 0.6 ポイント向上 ♪)

(イ) 泊数別

泊数別 1

1泊2日（小学校：17校，中学校17校，計34校） 5月～11月実施

○ 校種別人数

校 種	人 数	合 計
小学校	1 4 8 4	4 3 6 6
中学校	2 8 8 2	

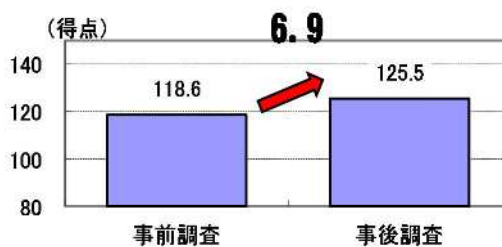


図1. 「生きる力」の平均値の推移

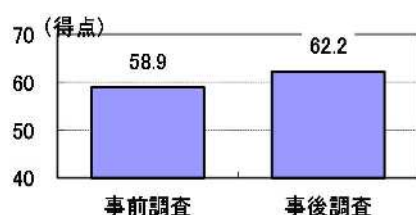


図2. 「心理社会的能力」の平均値の推移

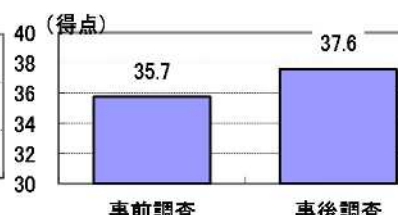


図3. 「徳育的能力」の平均値の推移

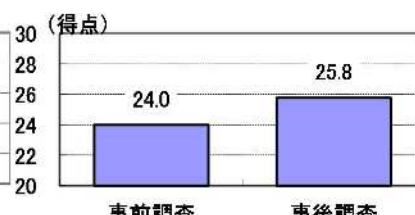


図4. 「身体的能力」の平均値の推移

《 3つの能力の中で特に得点が大きく向上した項目 》

- 視野・判断** 先を見通して、自分で計画が立てられる（心理社会的能力：0.4ポイント向上↑）
- 自己規制** 自分勝手な、わがままをいわない（徳育的能力：0.3ポイント向上↑）
- 日常的行動力** 早寝早起きである（身体的能力：0.5ポイント向上↑）

泊数別 2

2泊3日（小学校：2校 計2校） 6月～11月実施

○ 校種別人数

校 種	人 数	合 計
小学校	1 5 1	1 5 1

※いずれの学校も、キャンプ場泊と本館泊1泊ずつ

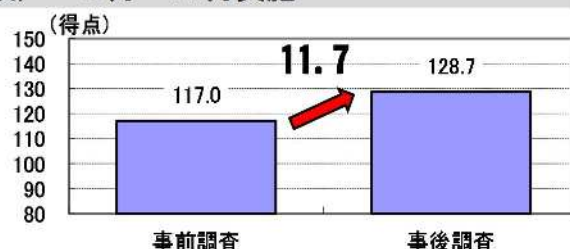


図1. 「生きる力」の平均値の推移

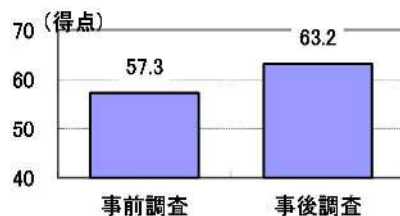


図2. 「心理社会的能力」の平均値の推移

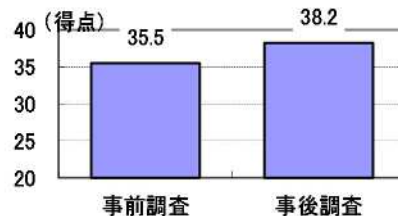


図3. 「徳育的能力」の平均値の推移

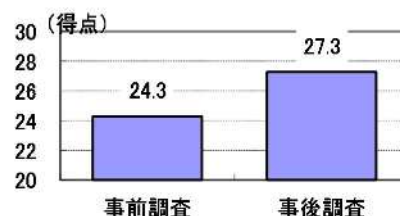


図4. 「身体的能力」の平均値の推移

《 3つの能力の中で特に得点が大きく向上した項目 》

- 非依存** いやなことは、はっきり言える（心理社会的能力：0.6ポイント向上↑）
先を見通して、自分で計画が立てられる（心理社会的能力：0.6ポイント向上↑）
- 思いやり** いやがらずに、よく働く（徳育能力：0.6ポイント向上↑）
- 日常的行動力** 早寝早起きである（身体的能力：0.6ポイント向上↑）

(ウ) 宿泊形態別

宿泊形態別 1

本館 (小学校：14校，中学校：16校 計30校)

○ 校種別人数

校 種	人 数	合 計
小学校	1 1 6 8	4 0 2 2
中学校	2 8 5 4	

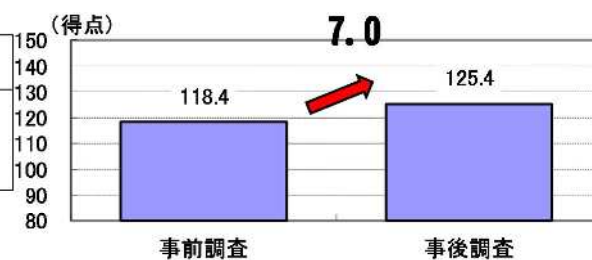


図1. 「生きる力」の平均値の推移

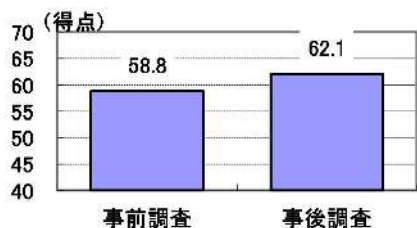


図2. 「心理社会的能力」の平均値の推移

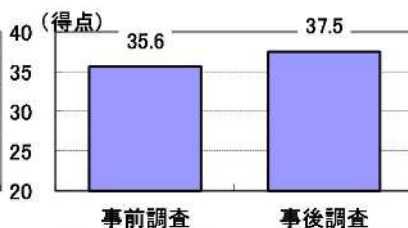


図3. 「徳育的能力」の平均値の推移

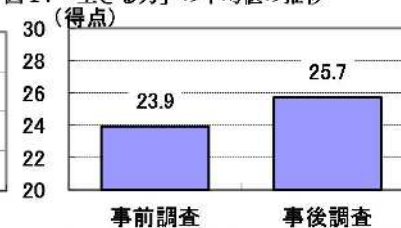


図4. 「身体的能力」の平均値の推移

《 3つの能力の中で特に得点が大きく向上した項目 》

視野・判断	先を見通して，自分で計画が立てられる（心理社会的能力：0.4ポイント向上↑）
非依存	小さな失敗はおそれない（心理社会的能力：0.4ポイント向上↑）
まじめ 勤勉	いやがらずに，よく働く（徳育的能力：0.3ポイント向上↑）
自然への関心	花や風景などの美しいものに，感動できる（徳育的能力：0.3ポイント向上↑）
日常的行動力	早寝早起きである（身体的能力：0.5ポイント向上↑）

宿泊形態別 2

キャンプ場 (小学校：3校，中学校：1校 計4校)

○ 校種別人数

校 種	人 数	合 計
小学校	3 1 6	3 4 4
中学校	2 8	



図1. 「生きる力」の平均値の推移

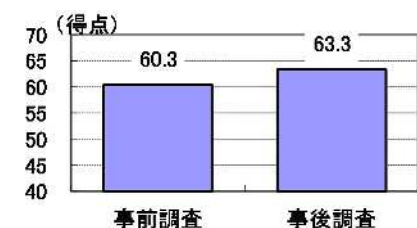


図2. 「心理社会的能力」の平均値の推移

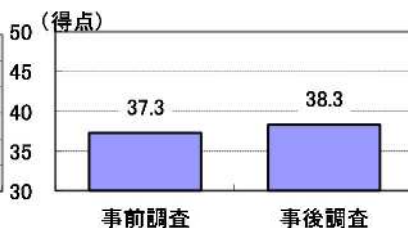


図3. 「徳育的能力」の平均値の推移

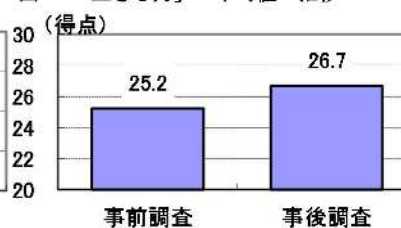


図4. 「身体的能力」の平均値の推移

《 3つの能力の中で特に得点が大きく向上した項目 》

視野・判断	先を見通して，自分で計画が立てられる（心理社会的能力：0.5ポイント向上↑）
自己規制	自分かってな，わがままをいわない（徳育能力：0.2ポイント向上↑）
日常的行動力	早寝早起きである（身体的能力：0.4ポイント向上↑）

宿泊形態別 3

キャンプ場→本館 (小学校：2校 計2校)

○ 校種別人数

校 種	人 数	合 計
小学校	151	151

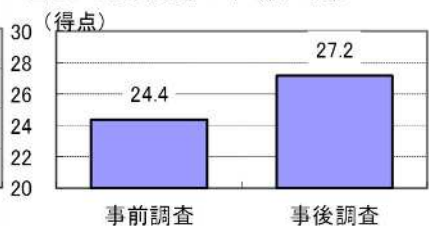
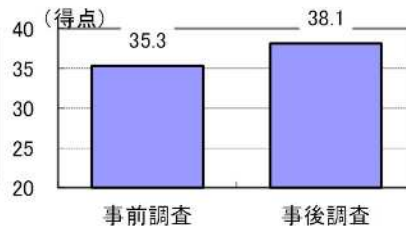
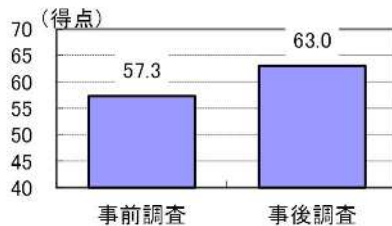
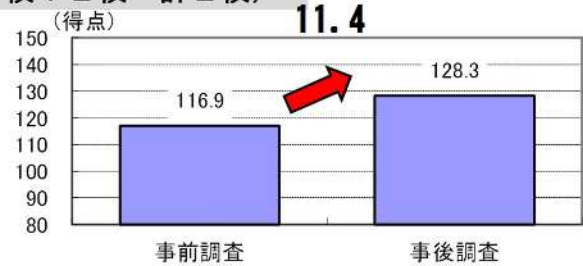


図2. 「心理社会的能力」の平均値の推移

図3. 「徳育的能力」の平均値の推移

図4. 「身体的能力」の平均値の推移

《 3つの能力の中で特に得点が大きく向上した項目 》

- 非 依 存** いやなことは、いやとはっきりいえる (心理社会的能力：0.6ポイント向上ノ)
- まじめ 勤勉** いやがらずに、よく働く (徳育能力：0.6ポイント向上ノ)
- 野外技能生活** ナイフ・包丁などの刃物を、上手に使える (身体的能力：0.7ポイント向上ノ)

(I) I K R 調査協力校の主な体験活動 (プログラム)

野外活動及び自然体験

- フライングディスクゴルフ ○キャンプ2 (野外炊事) ○星の観望
- 野外協力ゲーム ○白銀坂遠行 ○フォトウォークラリー
- キャンプ1 (テント設営・撤収) ○オリエンテーリング
- キャンプ3 (キャンプファイヤー) ○ナイトウォーク

文化創作 (クラフト) 活動

- 七宝焼き ○切り絵 ○竹ばし ○昆虫クラフト
- 年輪ネックレス ○勾玉 ○焼き板 ○ベニヤパズル

レクリエーション

- レクリエーション1 ○レクリエーション2 ○灯のつどい
- フライングディスクゴルフ ○室内運動会

演習

- グループワークトレーニング (GWT)

ウ 考察

以上のように、「生きる力」の変容について、校種や泊数、宿泊形態や学校規模に対するそれぞれの傾向を確認することができた。

校種別の変容については、「生きる力」が、小学校で 6.2 ポイント向上し、中学校で 7.4 ポイントといずれも向上した。校種の違いによる結果としては、小学校と中学校では、1.2 ポイントの差が見られた。これは、発達の段階における生活経験や体験の差が影響しているものとする。また、3つの能力の中から向上した項目として、「社会的心理的能力」の「視野判断／先を見通して、自分で計画が立てられる」、「まじめ勤勉」の「いやがらずによく働く」、「日常的行動力」の「早寝早起きである」が共通していた。

泊数別の変容については、「生きる力」が、1泊2日で 6.9 ポイント向上し、2泊3日で 11.7 ポイントといずれも向上した。泊数の違いによる結果としては、泊数が増えることによって、4.8 ポイントの差が見られた。これは、泊数が増えることに伴って、体験活動の機会(活動プログラム数)が増えたこと、家庭生活や学校生活以上に、集団での生活時間が伸びたことにより、自身の役割・責任が増したこと、規則正しい生活時間が伸びたことなどによるものとする。また、3つの能力の中から向上した項目として、「社会的心理的能力」の「視野判断／先を見通して、自分で計画が立てられる」、「身体的能力」の「日常的行動力／早寝早起きである」が共通していた。

宿泊形態別の変容については、「生きる力」が、本館泊で 7.0 ポイント向上し、キャンプ場泊で 5.5 ポイントといずれも向上した。宿泊形態の違いによる結果としては、本館泊とキャンプ場泊では、1.5 ポイントの差が見られた。これは、本館泊と、非日常の度合いの異なるキャンプ場泊において、昼夜自然の中で生活することとなり、テント設営・撤収、野外炊事(カレーづくり)など、仲間と協力しながら、生活の基盤となる寝食について準備、片付けまで体験したことによるものとする。活動主体を野外全般だけにおいている点で、違いがでたと考える。また、2泊3日で、キャンプ場泊から本館泊を実施した学校で、11.4 ポイント向上した。本館泊やキャンプ場泊のみと比較すると、いずれも「生きる力」が向上していた。これは、家庭生活に近い環境での本館泊、自然の中でのキャンプ場泊の両方を体験したことによるものとする。また、3つの能力の中から向上していた項目として、本館泊、キャンプ場泊では「心理的社会的能力」の「視野判断／先を見通して、自分で計画が立てられる」、「身体的能力」の「日常的行動力／早寝早起きである」の2項目が共通していた。さらに2泊3日で、キャンプ場泊から本館泊を実施した学校においては、「心理的社会的能力」の「非依存／いやなことは、いやとはっきりいえる」、「身体的能力」の「野外技能生活／ナイフ・包丁などの刃物を、上手に使える」についてがより向上した。これは、先ほどの家庭生活に近い環境での本館泊、自然の中でのキャンプ場泊の両方を体験したことによるものであり、より仲間との触れ合いの中で自分の考えを伝えることができるようになり、また野外炊事における活動が鮮明に残っていることが考えられる。

以上のように、3つの形態別集計から見た傾向について述べてきたが、各校の体験活動プログラムや実施形態は様々であり、活動プログラムとの因果関係に関する傾向を確認するまでには至らなかった。今後も、活動の事前・事後のI K R調査を研究の視点のひとつとして明らかにした上で継続するとともに、追跡調査の傾向をつかむためにI K R調査を継続し、分析する必要がある。また、今年度は野外活動におけるプログラムに特に注目して以下に分析を行った。

【野外活動及び自然体験】

野外協力ゲーム

調査対象17校の「生きる力」の変容（対象：児童生徒2451人）



図1.「生きる力」の平均値の推移

全体として「生きる力」が7.2ポイント向上していました。28項目中、特に「身体的能力」の「日常的行動力／早寝早起きである」が0.5ポイント向上していました。

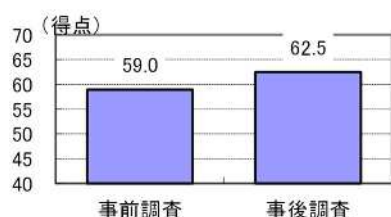


図2.「心理的社会的能力」の平均値の推移

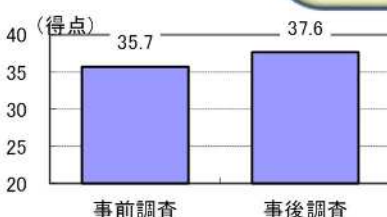


図3.「徳育的能力」の平均値の推移

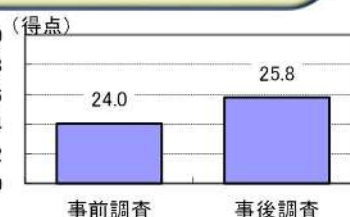


図4.「身体的能力」の平均値の推移

野外炊事

調査対象校9校の「生きる力」の変容（対象：児童生徒857人）



図1.「生きる力」の平均値の推移

全体として「生きる力」が6.0ポイント向上していました。28項目中、特に「身体的能力」の「日常的行動力／早寝早起きである」が0.5ポイント向上していました。

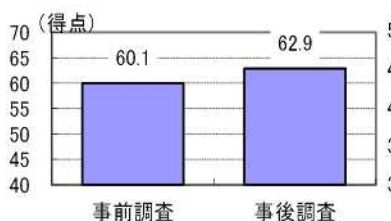


図2.「心理的社会的能力」の平均値の推移

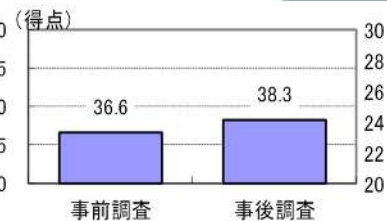


図3.「徳育的能力」の平均値の推移



図4.「身体的能力」の平均値の推移

野外協力ゲーム・野外炊事両方

調査対象校 7 校の「生きる力」の変容 (対象：児童生徒 8 6 9 人)

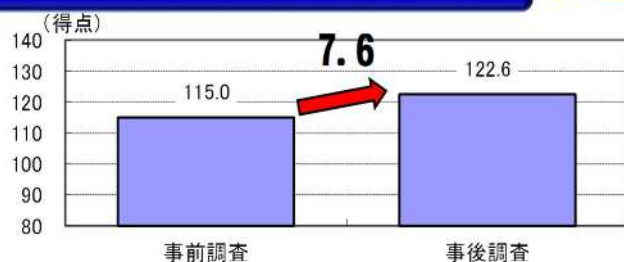


図 1. 「生きる力」の平均値の推移

全体として「生きる力」が 7.6 ポイント向上していました。28 項目中、特に「身体的能力」の「日常的行動力／早寝早起きである」が 0.6 ポイント向上していました。

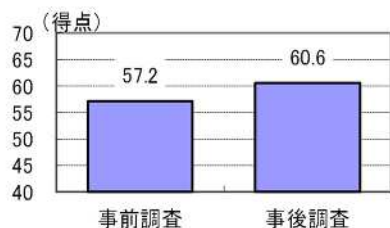


図 2. 「心理的社会的能力」の平均値の推移

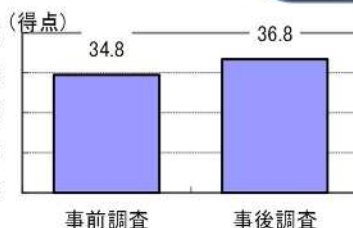


図 3. 「徳育的能力」の平均値の推移

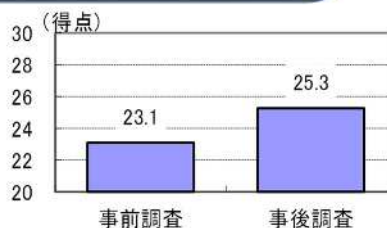


図 4. 「身体的能力」の平均値の推移

星の観望、星の学習

対象校 10 校の「生きる力」の変容 (対象：児童生徒 1 1 4 6 人)



図 1. 「生きる力」の平均値の推移

全体として「生きる力」が 8.1 ポイント向上していました。28 項目中、特に「心理的社会的能力」の「視野判断／先を見通して、自分で計画が立てられる」が 0.5 ポイント向上していました。



図 2. 「心理的社会的能力」の平均値の推移

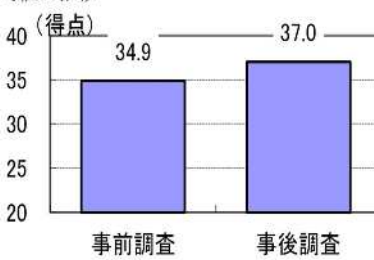


図 3. 「徳育的能力」の平均値の推移

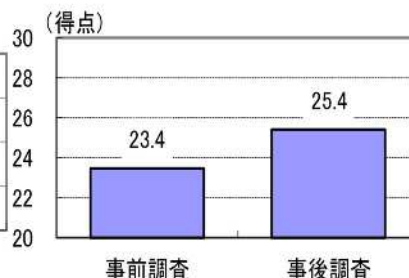
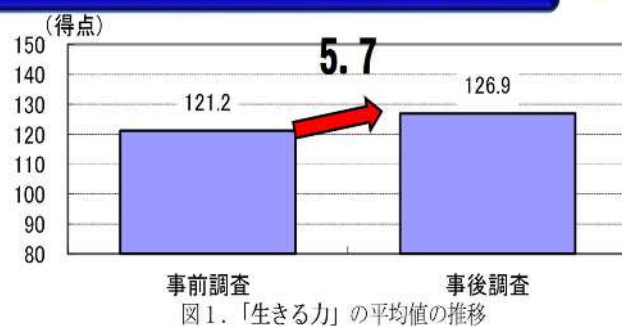


図 4. 「身体的能力」の平均値の推移

キャンプファイヤー，灯のつどい

対象校 18 校の「生きる力」の変容（対象：児童生徒 1757 人）



全体として「生きる力」が 5.7 ポイント向上していました。28 項目中、特に「心理的社会的能力」の「視野判断／先を見通して，自分で計画が立てられる」が 0.4 ポイント向上していました。

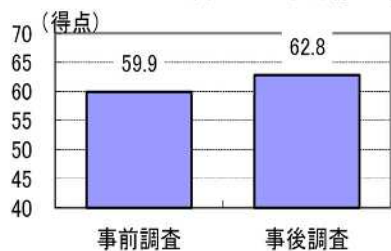


図 2. 「心理的社会的能力」の平均値の推移

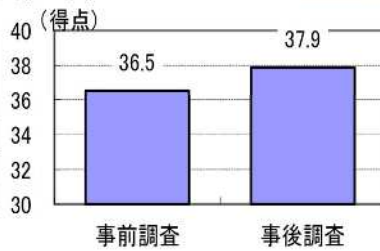


図 3. 「徳育的能力」の平均値の推移

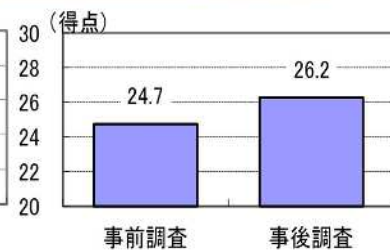


図 4. 「身体的能力」の平均値の推移

いずれも安全に留意しながら，協力して課題解決に当たる野外活動や炊飯活動である。また，夕方の時間帯に実施する研修Ⅲの中では，星の観望やキャンプファイヤーなど自然を堪能する観望や，静と動の区別をつけた中で，家族や仲間に感謝する心を持ち，今後の生活に生かすレクリエーション活動がある。いずれも野外活動では，「生きる力」があがっていることから有用性がわかる。以上のプログラムを，宿泊学習や主催事業の中で推進することで，「生きる力」の向上が見込めることがわかる。

(5) 教科と関連付けた活動プログラムを活用した活動プログラムの検証

本年度は2校と連携し、単元指導案に沿った活動プログラムの展開を検証した。

- 1 活動プログラム名 「野外炊事」
- 2 校種・学年 小学5年
- 3 教 科 家庭科
- 4 教 材 名 「家庭の生活再発見，食べて元気に，できるよ家庭の仕事」
- 5 単元目標

野外炊事を通して、火のおこし方や調理の仕方等について理解し、協力して食事を作る楽しさや食事のありがたさ、大切さに気付く。また、食生活について問題を見だし、よりよくしていこうと工夫することができる。

6 実践内容

【具体的な活動内容】

- 1 協力して食事を作る楽しさや食事のありがたさ、大切さについて考えながら、野外炊事を行う。
- 2 今後の学校生活や家庭生活に生かせることについて、実践を振り返り、意見交換を行う。



【炊飯棟で調理している様子】

【活動に当たって】

- 集団宿泊学習前に、自分の食生活を見直し、「自分でできること」や「してもらっていること」について考えたり、整理したりすることで、課題意識をもって活動に参加できるようにする。
- 活動前に担当職員と団体引率者で安全指導や学習指導要領に基づいた評価の観点、学校職員とセンター職員の役割分担等の確認を行う。
- 活動時の役割分担については、協力して調理することの大切さに気付かせる。安全指導上必要な職員配置を学校職員とセンター職員で分担し、それぞれの持ち場において、活動の様子を観察し、活動後情報交換することで、具体的な評価に向けての情報共有を図る。
- 野外炊事の楽しさや食事のありがたさ、大切さに気付かせた上で、活動上課題になった事項について、解決に向けた話し合いをしたり、振り返ったりする時間を設定することで、本プログラムの学びを今後の学校生活や家庭生活につなげるようにする。

【成果と課題】

成果： センター職員が活動のねらいを分かりやすく説明したことで、自分の役割を自覚して、協力の大切さを学び、取り組む姿が見られた。

また、活動中における行動が自主的であり、自信を持っているように窺えた。引率者は役割分担についても安全指導を含めながら、各自の持ち場において活動の様子を見たり、支援したりすることができていた。「心理的社会的能力」の向上に繋がり、今後は教育課程に反映したいとの意見もいただいた。

課題： 子どもたちの話を聞こうとする姿勢が見られたが、その後の実践に結びついていないと意見をいただいた。引率する職員で事前にしっかり共通理解を図っておくよう、プログラム調整会等で周知する必要がある。

- 1 活動プログラム名 「ベニヤパズル」
- 2 校種・学年 小学5年
- 3 教 科 図画工作科
- 4 単 元 名 「糸のこの寄り道散歩」
- 5 単 元 目 標

曲線切りした板の形や色の組み合わせ方を試したり，見付けたりして，創造的に発想する力や構想する力を培う。

6 実践内容

【具体的な活動内容】

- 1 学校で準備してきた下絵にカーボン紙を敷き，下絵を鉛筆でなぞりベニヤに下絵を写す。
- 2 複雑な線にしないように気を付けて，パズルになる部分を描く。
- 3 板を電動糸のこで切る。
- 4 切り取ったパズルに絵の具で色塗りをし，仕上げとしてスプレーニスをかける。
- 5 お互いの作品の鑑賞会を行い，友だちの作品のよさや，おもしろさを話し合う。



【電動糸のこを操作している様子】

【活動に当たって】

- 事前に担当職員と団体引率者で十分な打合せを行い，学習指導要領に基づいた評価の観点や学校職員とセンター職員の役割分担等の確認を行う。
- 事前に学校でパズルの下絵を考えたり，人数によっては，板に下絵を写したりして本センターでの活動に臨むことで，制作時間を確保することができる。
- 本センターには電動糸のこが11台あり，センター職員の支援も得ながら11人の児童が一斉に活動（板の切断）できる。
- 本センターには材料や機材等がそろっているため，学校職員の教材準備をする時間が短縮され，ねらいに沿った評価をしやすくなる。また，児童にとっても制作直後に相互鑑賞会や相互評価を行うことができる。

【成果と課題】

成果： 安全指導に十分配慮することができ，引率職員が個別指導に当たることで，児童は意欲的に活動できていた。活動場所が広く，機材も多く揃っているため，活動中に互いに教え合うなど協力する様子が見られた。活動のねらいや制作の流れを把握でき，職員にとっては，初めて電動糸鋸を使う子どもにも丁寧な対応ができていた。児童の細かな反応を捉えることができ指導しやすかったとの意見をいただいた。

課題： 複雑な曲線を描いていなくても，作業の習熟度の違いから線に沿って切ることができない児童がいた。このような児童にも個別指導を生かしながら支援したり評価したりすることができるが，一方で児童全員の様子を観察し，指導することが難しい面に気付くことができた。文化創作活動においても，指導する立場での注意点や評価におけるポイントを相互に共有し，活動することができた。

(6) 主催事業における「体験活動」と「生きる力」の関連性の検証

【実践事業1】

- 1 事業名 悠遊学舎 わくわくサマーキャンプ
- 2 期 日 令和5年7月25日（火）～7月30日（日） 5泊6日
- 3 参加者 小学校5年生～中学校3年生 28人
- 4 経 費 13000円
- 5 事業内容

(1) 事業の趣旨

鹿児島をフィールドに、様々な体験活動を通して、達成感や満足感、仲間とつながるよさを味わわせることで、自己肯定感を高め、心身ともにたくましい鹿児島の青少年を育成する。

(2) 事業の意味とねらい

本事業は、小学校5年生から中学生までを対象にした事業である。この期の子供たちは、5泊6日の長期にわたって親元を離れるという経験は少ない。また、一般に人間関係の問題や生理的な欲求（食べる、寝る、排泄する等）を我慢できるのは2泊程度までで、3泊目頃から生活環境の違いや一定の人間関係の摩擦に耐えきれなくなり、時には友人と衝突したり、ホームシックにかかることが多いといわれている。^{*1}しかし、集団生活であるため、そのような問題が起きても、逃げ出すことはできない。そこで、話し合い、問題を解決し、助け合う関係を子供たち自身が見いだしていかなければならない場面が必然的に生まれてくる。これらの課題を、子供たちが試行錯誤しながら乗り越えることが、他人と協調して物事をやりとげるために必要なことを知り、協力することの大切さに気付く機会となると考える。

また、火を使った調理や、野外で全ての生活を自分の力でやり遂げる経験は、普段の生活では出来ない活動であり、それを自分自身の力で乗り越える（出来るようになる）経験は、自己の成長を感じる機会となり、新たな自己との出会いや、成就感、自尊感情の獲得につながると考える。

更に本事業では、テントで宿泊したり、食事を野外で自分たちでつくったり、山に登ったりするなど、どっぷりと自然に浸る体験を計画する。自然と深く関わる機会が減少している現代の子供たちにとって、本事業の活動のように、身体全体で対象に働きかけ、関わっていくそれらの体験活動で、「見る（視覚）」「聞く（聴覚）」「味わう（味覚）」「嗅ぐ（嗅覚）」「触れる（触覚）」を総合して働かせ、物事を感覚的にとらえることができる経験は、それ自体が貴重であり、その経験が、自然を尊重することや、環境の保全に寄与する態度を養うことにつながると考える。

これら全ては、「生きる力」の育成につながることであり、本事業も「生きる力」の高まりを目指すのが、その「生きる力」が高まった子供たちの具体的な姿を以下のように設定したい。

【「生きる力」が高まった姿】

- よりよく活動するために、解決の方法を話し合い、多様な意見を受け入れながら最後まであきらめずに協働して実践し、協働することの良さに気付く姿
- 異年齢活動での他者との協働の活動や、様々な自然体験活動にチャレンジし、達成する経験をすることにより、自己の成長を感じ、成就感、自尊感情の高まりを感じる姿
- 自然の中に浸る自然体験活動を繰り返し行うことにより、自然を尊重しようとする態度や、環境の保全に寄与しようとする態度が高まった姿

*1 文部科学省 体験活動事例集－体験のススメー「平成17、18年度豊かな体験活動推進事業」 2007

(3) プログラムを企画するにあたり

ア プログラム企画のキーワード

ねらいを達成するために、以下をキーワードとしてプログラムを設定した。

- 普段体験できない自然体験活動（どっぷりと自然に浸らせる）
- やり遂げたときに、うれしさのある活動（成就感、自尊感情を高める）
- 課題達成型の体験活動（チームワークを高める、協働の良さに気付かせる）
- 自然の雄大さや、怖さに気付かせる体験活動
- 自然物を生かした創作活動（自然の恵み、良さに気付かせる）

イ 「振り返りの時間」の設定と指導者の立場

長期にわたるキャンプでは、体験して感じたことや、子供同士のトラブルから考えたことなど、子供たちの心に様々な変化が起こることが考えられる。これを言葉にし、互いに聴いてもらう時間を設定したい。体験した苦労やうれしかったこと、また人間関係のごたごたなどの不満をグループの仲間に聴いてもらい、受け止めてもらい、時には問題を一緒に解決する。これを繰り返すことが、他人と協調して物事をやりとげる難しさ、自分の意見を受け止めてもらえることのうれしさ、協力するために必要なことなどを考えたり知ったりする機会となると考える。また、指導者側の立場として、子供同士の不満などが表出する事態になったときも、まずはグループでの自発的、自治的な話し合いの指導を重視していく。指導者が解決策を提示することも時には大切であるが、試行錯誤しながら解決策を子供たち自身が考え出すことが、ねらいを達成するために大切なことであると考ええる。

ウ グループ編成と「リーダー」の設定

今回の事業は、5年生から中学生までの異年齢集団での活動となる。この機会を生かし、意図的なグループ編成を行い、年齢が違う仲間との多様な交流を生み出せるようにした。

また、自然の中での長期の集団生活では、普段慣れ親しんだ環境とは違い、様々な不便を強いられる。役割分担等を巡って意見が食い違い、人間関係に摩擦が生じるであろう。このようなトラブルが生じた際に、集団の中で腹を割って話し合い、その場に応じた適切な役割分担を決めさせ、協力関係の下でトラブルを乗り越らせていく。その際に、必要なのは、それらを推進していくリーダーの存在である。自然発生的に生まれることもあるだろうし、個人の資質もあるだろうが、特に中学生がリーダーとしての役割を果たせるようにする。最初は、リーダーとしてうまくいかない場面も考えられるが、指導者がサポートしていくことで、リーダーを中心とした自治的な解決策を子供たち自身が考え出すことができるようにする。

エ 職員のサポート体制について

子供たちの心身のサポートにあたるため、グループ毎の担当指導者を2人ずつ設定する。グループ担当者2人が交代しながら、担当グループを5泊6日を通して見守ることによって、子供たちの成長や頑張りや変化に気づき、適切な言葉かけや指導ができると考える。子供たちの変化に対応した言葉掛けによるフィードバック（前より良くなっているよ、できるようになったね など）をすることにより、子供たち自身が自己の成長や成就感を感じることができるようになる。

また、トラブルが起きたときにもその前後の流れが把握できているために、適切な助言ができ、集団として課題を解決するために必要な助言や見守りができると考える。

更に、グループ担当指導者と事業責任者とで、その日の様子を振り返るミーティングの時間を設定し、情報交換をすることにより、その日の子供たちの変化や課題について、職員が共通認識した上で、次の日の指導にあたれるようにする。

オ 昨年度の反省等を受けた変更点

- 所内完結型から所外利用型へ
 - ・ 所内だけでは味わえないダイナミックな活動，学習ができるようにする。
 - ・ 大隅の自然を利用することで，本センターにはない様々な自然体験をさせる。
- 余裕をもたせたプログラムへ
 - ・ 余裕をもたせたプログラムにすることで，子供たちが心身共にしっかりと活動に集中できるようにする。
 - ・ 職員に余裕が生まれることで，参加者の体調や心境の変化，グループの変化など今まで以上に見届けや声掛けができるようにする。
- 思い出を届ける，持ち帰る
 - ・ インスタで活動の様子を随時知らせる。
 - ・ 使い捨てカメラを希望者に持参させる。
- 「振り返りの時間」の設定
 - ・ 振り返りの時間を設定することで，子供たちが困ったことや思っていることについて相互解決できるようにする。

6 事業の計画

ステージ	主な活動内容	ステージのポイント
準備の ステージ	全体説明会 アイスブレイク	・ 子供と保護者の不安や心配を軽減し，キャンプへの意欲を高める。 ・ 子供たちに活動の見通しをもたせるとともに，子供の特性を把握する。 ・ 子供同士の関わりを観察し，キャンプのグループ分けの参考にする。
出合いの ステージ 1日目 ～2日目	入村式 野外炊事 野外協力ゲーム	・ 安心してキャンプを進められるように，全体の約束事や活動時のマナーづくり，受容的な雰囲気などのキャンプの枠組みを作る。 ・ 参加者の緊張を和らげ，グループ内での関わりが生まれるようなプログラムを組み入れる。 ・ 野外調理を繰り返し行わせ，グループで役割を分担しながら，調理活動への習熟を図っていく。また，自分の役割を果たす良さや大切さに気付かせる。
自然に学ぶ ステージ 3日目 ～5日目	桜島について学ぶ 自然物を使った創作活動 カヌー体験 クライミング体験 ハイキング ピザ作り	・ 桜島の成り立ちや，災害を防ぐ工夫について学び，自然の雄大さや怖さに気付かせる。 ・ カヌー体験，ハイキング体験等，どっぷりと自然に浸る活動をさせる。 ・ 体を動かした後の自然の中で食べる食事のおいしさや，仲間と協力して活動する良さに気付かせる。 ・ 桜島の灰や，海の漂着物などを利用したクラフト活動をすることにより，自然の恵みや良さに気付かせる。 ・ 意見の衝突やトラブルが起きたときには，グループの問題として捉え，グループで主体的な解決ができるようにする。
まとめの ステージ 6日目	活動報告会へ向 けての準備 活動報告会	・ 活動を振り返ることにより，自分の頑張りや成長に気付かせる。

7 日 程

悠遊学舎 わくわくサマーキャンプ日程

		7月25日(火)	7月26日(水)	7月27日(木)	7月28日(金)	7月29日(土)	7月30日(日)
場所		青少研	青少研	青少研→大隅	大隅	大隅→青少研	青少研
6	00		起床・洗面	起床・洗面	起床・洗面	起床・洗面	起床・洗面
	30		朝のつどい	朝のつどい	活動準備	活動準備	活動準備
7	00		活動準備	簡易朝食	朝のつどい	朝のつどい	朝のつどい
	30			テント撤収	朝食 (食堂利用)	朝食 (食堂利用)	
8	00		朝食 (食堂利用)	移動準備	海へ移動 (雨天時: 藍染め)	錦江湾眺望ハイキン グ (雨天時: もるつく, レク リエーション)	朝食 (食堂利用)
	30						
9	00		野外協力ゲーム (雨天時: 室内運動 会)	桜島フェリー乗り場ま でバス移動	漂流物拾い (雨天時: 藍染め)		活動のまとめ
	30						
10	00		出合いのつどい	10:00フェリー発 10:15フェリー着	カヌー体験 (雨天時: 藍染め)	野外炊事 ・ピザ作り	活動報告会
	30		オリエンテーション アイスブレイキング	桜島ビジターセン ター、溶岩なぎさ公園 での学習 ※ 鹿児島市ジオツー リズム課ガイド付き			
11	00	野外炊事 ・焼き鳥丼、シャーベッ トづくり	昼食 (注文弁当) 桜島国際火山防災セ ンターへ徒歩3.7km	昼食 (食堂弁当)		別れのつどい 解散(11:45)	
	30						
12	00	昼食 (食堂利用) ※ 写真撮影	桜島国際火山防災セ ンターでの学習	スポーツクライミング	移動準備		
	30						※ 写真撮影
13	00	キャンプ場オリエン テーション	グループワークトレ ニング	大隅青少年自然の家 までバス移動	漂流物クラフト	15:25フェリー発 15:40フェリー着 青少研までバス移動	
	30						テント設営 【雨天: インナーテント 設営体験】
14	00	野外炊事 ・カレーづくり	野外炊事 ・炊き込みご飯、豚汁	出合いのつどい・オリ エンテーション 部屋への移動	野外調理 ・焼肉	部屋への移動	
	30						
15	00	野外炊事 ・カレーづくり	野外炊事 ・炊き込みご飯、豚汁	夕食 (食堂利用)		夕食 (食堂利用)	
	30					入浴	入浴
19	00	洗濯・準備	洗濯・準備	桜島の灰絵(へえー)	入浴	入浴	
	30					振り返りの時間	
20	00	振り返りの時間	振り返りの時間	振り返りの時間	振り返りの時間	活動のまとめ	
	30						
21	00	就寝準備	就寝準備		洗濯・準備	就寝準備	
	30	就寝	就寝	就寝	就寝	就寝	
22	00						

8 活動の実際

本事業のねらいは、大きく「協働」「成就感、自尊感情の高まり」「自然体験活動」の3つであり、そのねらいを達成するためにプログラムを企画した。これらの観点に則り、参加者の様子、アンケートの記述から活動の実際についてまとめる。

(1) 協働

1日目のテント設営や野外炊事は、グループ（グループは、1グループ7～8人、4グループで編成した）で協力しながら活動する場面が多くなる内容だった。最初は緊張していた様子の参加者も、一緒に活動するにつれ自然と会話が多くなり、コミュニケーションをとろうとする様子が見られた。アンケートでも「グループで協力する活動が多くてグループの人と仲良くなるきっかけとなった」という記述があり、これらの活動を通してグループのメンバーと打ち解けられたと感じる参加者が多かったことが分かる。「振り返りの時間」では、リーダーを中心にグループ毎に話し合いを行った。内容は、それぞれの日で設けられているテーマとその日にあった出来事を話し合うことである。1日目のテーマは、「仲良くなるには？」であったが、「たくさんの人と積極的に話すことが大事。相手の表情を気にしたり、話題を工夫するなど、ただ話すことではなく、相手を考えながら工夫して話すことが大事である。」「自分のことだけではなく、相手を気遣うことが必要である。」というグループのまとめが出され、納得したように頷きながら聞いている子供が多かった。

2日目は、協力をテーマとし、野外協力ゲームやグループワークトレーニングを行った。アンケートには、「楽しみながら仲間との絆を深めることができた」「みんなと協力ができた」「みんなでの活動について考える一日になった」などの記述が多く見られ、グループで協働して取り組むことを意識して活動していたことが分かる。また、野外炊事も引き続き行った。1日目を生かした改善がなされ、効率よく調理や片付けができていた。

3日目は、桜島に行き学習を行った。1日目2日目は、ほぼグループ単位での活動であったが、3日目は移動や学習を含めグループでのしほりをゆるくした。最初の2日間で大切と考えていたことは、子供たちがグループに所属感を感じ、居場所があるという安心感を持たせたいということだったが、これまでの活動でおよそ達成できたと考えたからである。また、グループ単位での活動が続いていたために、人間関係が固定され窮屈になりがちであることも考慮した。バス移動、徒歩移動、フェリー移動、学習も含め6、7時間ほどだったが、同学年同士や気の合う者同士で楽しそうにコミュニケーションをとる姿が見られ、これ以降、他のグループ同士でも協力する姿が見られるようになった。



野外協力ゲーム



振り返りの時間



野外炊事

子供たち自身が課題に気付き解決していくために、グループ担当の指導者は必要であると判断した以外では、多少の意見の食い違いがあっても介入をしないようにしていた。リーダーを中心とした自治的な活動をねらいとしていたためである。最初の2日間ほどは、ほぼ衝突することなく活動を行っていた各グループであったが、3日目からは、2つのグループで意見の食い違いがおこってきた。野外炊事や各自に割り振られた仕事を行えなかったり、リーダーが強く指示をしすぎたりするなどが主な内容である。残りの2つのグループでも、小さなトラブルがおきていた。リーダーを中心として話し合いがなされたが、すぐに解決というわけにはいかないグ

グループもあった。解決策が決まり、その方向で進んでいこうとするが、実際には出来ないといったことである。何度も繰り返し話し合いが行われ、試行錯誤しながら子供たちなりに解決を図ろうとしている姿が見られた。初日に出された「相手の事を考える」の本当の意味を、個人個人が考える6日間だった。

【参加者の感想】

- 本当の協力とは何かということを知った。
- 途中で親に会いたくなったり、家に帰りたくなったりしたけど、グループのみんなとお互いを支えることができた。私は最初あまり自分から話しかけることができなかったけど、グループ活動や仲良くなる事について考えて積極的にみんなに話しかけることができるようになった。
- 人に気を配ったり、周りを見て行動する力がついたと思う。リーダーをしたため、みんなをまとめる力がついたり、いろいろな人と話せるようになったことが成長したところだと思う。たくさんの参加者の中で、自分の事、人の事を感じる力もついたと思う。
- いろいろな活動で、みんなで協力して成し遂げる楽しさを実感して、一人でするよりもみんなでするほうが楽しいと考えが変わった。
- みんなと協力する大切さをよく学ぶ事ができた。みんなで作って食べたご飯はとっても美味しかった。

(2) 成就感、自尊感情の高まり

テント設営や、野外炊事など普段の生活では経験することのない体験をしたり、衣類の洗濯、身の回りを整えることなどを保護者の手助け無しで自分だけでやり遂げたり、6日間保護者と離れて過ごすなど、キャンプ自体が個人の差こそあれチャレンジが必要な内容である。

保護者と離れて過ごすことに不安を感じ、泣き出したり、元気がなくなったりする子供が2日目の夜あたりから複数人見られた。だが、仲間や指導者に寂しい気持ちを聴いてもらったり慰めてもらったりしながら、なんとか乗り越えようと頑張った。

また、6日間の中に、4キロ程度の徒歩移動など体力を使う活動を計3回取り入れた。途中で立ち止まったり、隊列から遅れたりする参加者に対してお互いに声かけをしながら、みんなで乗り越えようとする姿が見られた。スポーツクライミングにも挑戦した。「もう少しだよ、がんばって！」などの声掛けや、それぞれが頑張ったことに対する大きな拍手が自然に起きるなどの場面が多々見られた。

結果、体調不良者を除き、全員が全プログラムをやり遂げることができた。



錦江湾眺望ハイキング



頂上から見た錦江湾



スポーツクライミング

【参加者の感想】

- サマーキャンプに参加して変わったことは、自分の事は自分でするということだ。いつも親にまかせっぱなしだったから。少しは成長したと思う。これから意識したいことも、自分の事は自分でということだ。家でも頑張っているいろいろな事に挑戦していきたい。
- 私は辛抱するのが苦手だった。でも今回全体を通して、約12キロ歩いて絶対体力もついたり、自分の心の弱いところも倒すことができた。嫌な事から逃げ出す

のではなく、それを乗り越えることが大事だと分かった。

- 初めて2日以上のキャンプに参加して、普通のキャンプよりも仲間と打ち解けることができた。前は人見知りで仲良くなるのに時間がかかったが、今は少し自信がついた。また今回のようなイベントがあった場合は、みんなが私にしてくれたように、手を差し伸べてあげようと思う。
- 変わったことは、あまりいらいらしなくなった。学校では男女を分けてしまっていたけど、男女関係なくしゃべりかけられた。これからも男女関係なくしゃべることを意識していきたい。

(3) 自然体験活動

3日目の桜島では、桜島ビジターセンター、桜島国際火山防災センター、溶岩なぎさ公園を訪れ、桜島についての学習を行った。アンケートでは、「知らなかった地元について学ぶ事ができた」や「桜島の災害の怖さを知った」などの記述が多く見られ、鹿児島県人にとって身近には存在するが、実際にはあまり知らない桜島の事について深く知る機会となったようだ。また、桜島の灰を使った灰絵のクラフト活動においても、楽しみながら活動していた。

4日目は、「自然にどっぷり浸る」をテーマに、カヌー体験や漂流物クラフト作りを計画した。特にカヌーにおいては、初めて経験するという参加者が多く、海の風を感じたり、仲間と協力して漕いだりするなど、非常に楽しんでいる様子が見られた。

5日目は、「自然にどっぷり浸る2日目」をテーマに、ハイキングやピザ作りを計画した。ハイキングについてのアンケートでは、「初めて歩いて良かったと思った」「みんなの応援の力で乗り切った」などの記述が多く、疲れはしたが、仲間と声を掛け合う良さや、最後までやりきる気持ちよさに気付いた参加者が多いことが分かる。ピザ作りについても、「4キロがきつかったけど、ピザが美味しかったから良かった」など、体を動かした後に、食べる食事のおいしさにも気付いた参加者も多く見られた。



カヌー体験



溶岩なぎさ公園



灰を使ったクラフト

【参加者の感想】

- 学校ではあまり笑顔が出ないけど、このキャンプをやっていって自然に笑顔になるのは久しぶりだった。家ではゴロゴロとテレビをたくさん見ていたため、こんな自然豊かな場所で気持ちがいい風に当たってキャンプするのも最高だった。
- 自然には火山灰や土石流、噴火など私たちに悪影響を及ぼすものがあることを知った。一方で温泉や観光スポットにしたりするなど、私たちに良い影響があるものも多くある。これらのことから、自然には良いところも悪いところもたくさんあって、そのことを理解してうまく共存していくことが大切だと思った。
- ハイキングは筋肉痛になったけど、それと引き換えに絶景を見ることができた。

9 事後

(1) 保護者アンケートから

サマーキャンプの1ヶ月後、保護者を対象にし、「キャンプに参加させて変化したことや良かったと思うこと」についてアンケートを行った。

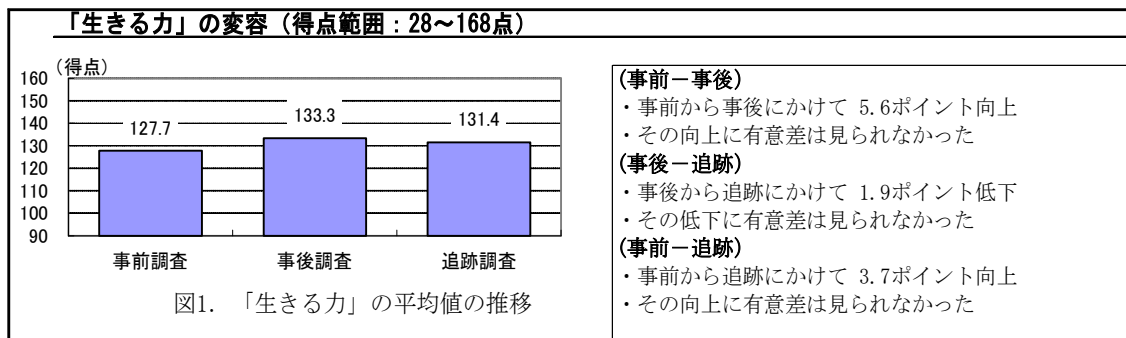
【保護者アンケート ～一部抜粋～】

- 初めて出会った仲間と何泊も寝食を共にしてうまくいかないことが多く苦労したようでした。その体験はとても貴重なことで、日常生活や学校で何かあってもキャンプのことを参考にしながら、「そんなときどうする？」という考え方をもてるようになってきたように感じています。帰宅後に体験したことを話す子供の目の輝きは忘れられません。
- 色々な学年の子供たちと協力して何かをやり遂げる事に達成感や楽しさを感じた様で、色々な話をしてくれました。キャンプに行く前はずっと渋っていましたが、来年も参加してみたいとめずらしくやる気を見せてくれました。
- 自分から何かを意欲的にするようになり、まとめ役になるようになりました。苦手な事にもチャレンジしてみる事も増えた気がします。
- きつい事からすぐに逃げている方が多かったけど、少し頑張ってみようという気持ちが持てるようになった気がします。

【考察】

今回の事業では、「自然にどっぷりつかると経験すること」「仲間と一緒にどのようにしたら解決できるかを考え、協力して活動すること」「自分のことは自分ですること」等をねらいにしていることを、事前説明会で保護者に対して説明をした。アンケートの記述からは、そのねらいを達成していると感じており、サマーキャンプ後の変化を感じている保護者が多い事が分かった。5泊6日の長期にわたるキャンプでは、長期だからこそおこる人間関係を含む問題を、子供たち自身が試行錯誤しながら乗り越える必要があり、その経験が今後の子供たちの生活場面で「生きる力」として働くのではないかと仮定していたが、今回の保護者の記述からは、その成果も十分に現れていると考える。

(2) I K R 調査から



本事業での生きる力について、「事前から事後」「事前から追跡」については、数値的な上昇は見られたが、有意差は見られなかった。「心理的社会的能力」「徳育的能力」「身体的能力」の下位項目についても同様の結果であった。

10 成果と課題

〈成果〉

- 事業のねらいと子供たちの具体的な姿を明確にし、プログラムを組み立てた。その結果、事業に関わる全職員が目指す姿について共通理解をした上で、参加者に働きかけることが出来、継続した指導や助言が行えた。
- I K R 調査の結果からは、「生きる力」について有意差は見られなかった。だが、参加者の活動の様子や感想、1か月後の保護者からのアンケート結果からは、ねらいを達成した姿が見られる。このことから、本事業のねらいとしていたものは、子供たちの具体的な姿として見られ、概ね達成されたと考える。

〈課題〉

- 本事業とは別事業であるが、冬にウインターキャンプが実施され、サマーキャンプの参加者4人が参加した。初対面の友だちとのコミュニケーションや、協力する姿などサマーキャンプから更に成長した姿が見られた。同参加者を対象に事業を複数回実施することで、更なる「生きる力」の高まりが見られるのではないかと考える。

【実践事業 2】

1 事業名 悠遊学舎わくわくウインターキャンプ

2 期 日 令和5年12月24日（日）～25日（月） 1泊2日

3 参加者 小学生（男子7人 女子5人）、中学生（男子0人 女子3人）合計15人

4 経 費 2,000円（食費1,410円、保険料100円、シーツ代60円、活動材料費430円）

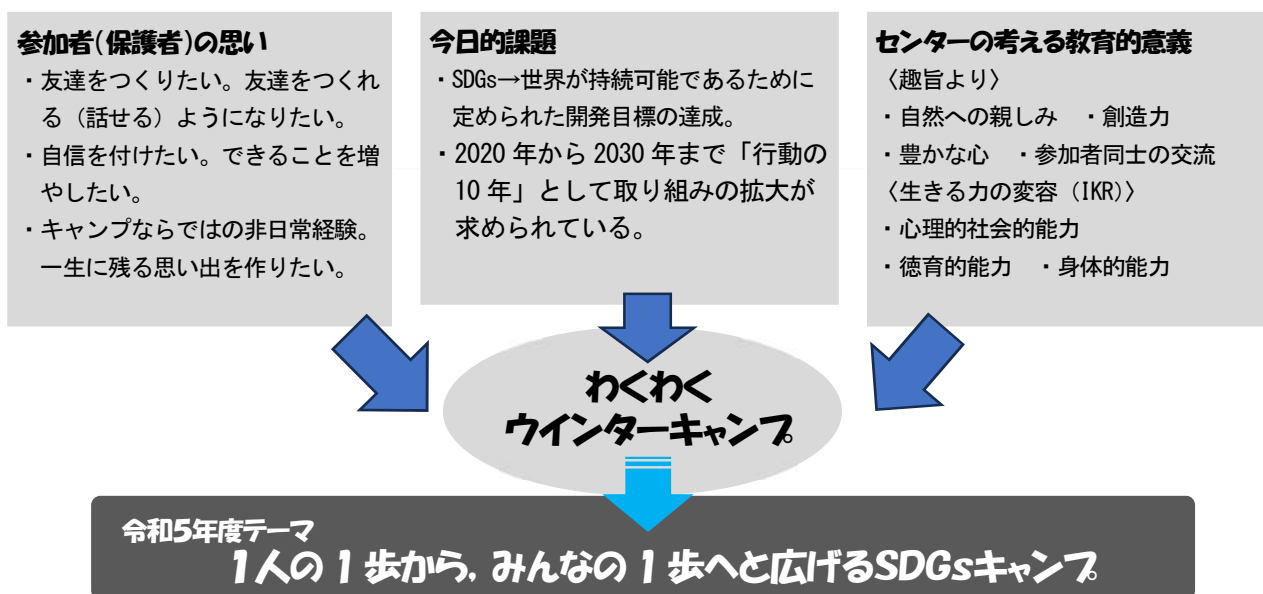
5 事業内容

(1) 事業の趣旨

冬の厳しい寒さの中、青少年研修センターでの様々な体験活動を通して、自然に親しみ、創造力を高め、豊かな心を育むとともに、参加者同士の交流を深め、よりよい地球環境を考え実践する機会とする。

(2) 事業の特色

本事業は、小学5年生から中学生を対象とした事業である。冬の過酷な環境の中でのキャンプを通して、自分自身と向き合いながら更なる成長を実感できるようにすること、参加者同士で協力することの大切さやよさに気付くことができるようにすることをねらいとした。さらに、今日的課題であるSDGsの視点を加え、よりよい地球環境について参加者とともに考え実践することを通して、持続可能な社会の作り手としての意識を高めることもねらいとして、本事業を企画することとした。



(3) プログラムを企画するに当たり

ア テーマの設定

本事業のテーマを「1人の1歩から、みんなの1歩へと広げるSDGsキャンプ」とし、環境への配慮を柱として、2日間のプログラムを構成した。さらに、事前説明会や初日のオリエンテーションで、参加者にもテーマのねらい等について説明することで、参加者一人一人が目的意識をもって2日間の活動に取り組むことができるようにした。

イ 班の設定

限られた時間の中で活動のねらいが達成できるように、8人ずつの2班を編成した。

ウ 職員による指導

テーマのねらいに迫るプログラムが展開できるように、事前に職員研修を実施し、事業のテーマやめざす参加者の姿などについて、共通理解を図った。

6 日 程



悠遊学舎わくわくウインターキャンプ 日程表

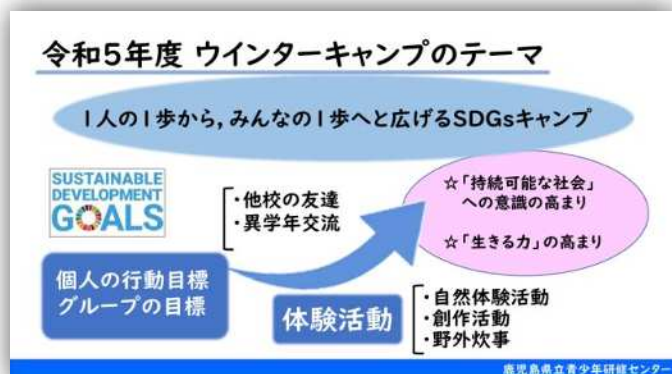
1日目(12/24)	
9:00 ～ 10:00	受付
10:00 ～ 10:50	出合いのつどい オリエンテーション アイスブレーキング
11:00 ～ 11:50	【活動1】 クラフト(竹ばしづくり)
12:00 ～ 13:00	昼食 (食堂利用)
13:00 ～ 14:50	【活動2】 テント設営
15:00 ～ 15:50	【活動3】 薪割り体験 火起こし体験
16:00 ～ 18:30	【活動4】 野外炊事(SDGsカレーづくり)
19:00 ～ 20:00	【活動5】 キャンプファイヤー
20:10 ～ 20:45	1日の反省
21:00 ～ 22:00	自由交歓 就寝 キャンプ場泊

2日目(12/25)	
6:00 ～ 6:50	起床・洗面 【活動6】 モーニングウォーク
7:00 ～ 9:20	【活動7】 野外炊事 (SDGsご飯とみそ汁づくり)
9:30 ～ 10:50	【活動8】 テント撤収
11:00 ～ 11:40	【活動9】 振り返り, 感想記入 発表会練習 写真撮影
11:50 ～ 12:10	【活動10】 活動発表会
12:10 ～ 12:30	別れのつどい
	解散



7 指導の方向性

～1人の1歩から、みんなの1歩へと広げるSDGsキャンプ～



(1) ESDで育む能力とIKR調査（生きる力）との関連

ESDで育む能力		IKR調査（生きる力）の項目	
①	批判的に考える力	視野・判断	3 先を見通して自分で計画が立てられる。
②	未来像を予測して計画を立てる力	適応・行動	17 自分で問題点や課題を見つけることができる。
③	多面的総合的に考える力		8 人の話をきちんと聞くことができる。 22 その場にふさわしい行動ができる。
④	コミュニケーションを行う力	明朗性	5 だれにでも話しかけることができる。
⑤	他者と協力する力	交友・協調	7 多くの人に好かれている。 21 だれとでも仲良くできる。
⑥	つながりを尊重する態度	思いやり	2 人のために何かしてあげるのが好きだ。 16 人の心の痛みが分かる。
⑦	進んで参加する態度	積極性	11 自分から進んで何でもやる。 25 前向きに、物事を考えられる。

(2) 各活動のねらいとESDで育む能力（①～⑦）

1 日目	2 日目
【活動1】 【クラフト（竹ばし）】 - 完成作品のイメージをふくらませながら、工夫して表現できるようにする。 - 互いの作品の良さや美しさ、面白さや楽しさなどに気付かせ、交流する。 - 創作活動の楽しさや素晴らしさを味わう。 ☆ESDで育む能力（②④⑤⑥⑦）	【活動6】 【モーニングウォーク】 季節の変化を体感するとともに、青少年研修センターの自然に触れる。 ☆ESDで育む能力（④⑤）
【活動2】 【テント設営】 役割分担にそって必要な道具をそろえ、仲間と協力してテントを立てる。 ☆ESDで育む能力（②⑤⑦）	【活動7】 【野外炊事（ご飯とみそ汁）】 - カレーづくりの振り返りをもとに、更に効率のよい調理の仕方を考え、実践する。 - 準備から後片付けまで協力して取り組む。 ☆ESDで育む能力（①②③④⑤⑥⑦）
【活動3】 【薪割り・火起こし体験】 - 火にまつわる人々の知恵や苦勞を知り、火の起こる仕組みを学ぶ。 - 火を起こす喜びを体感し、火の大切さやありがたさを理解する。 ☆ESDで育む能力（①②③⑥⑦）	【活動8】 【テント撤収】 役割分担にそって、仲間と協力して、テントを撤収する。 ☆ESDで育む能力（②⑤⑦）
【活動4】 【野外炊事（カレーづくり）】 - 限られた薪の量、水の量で調理するための方法を考え実践する。 - 準備から後片付けまで協力して取り組む。 ☆ESDで育む能力（①②③④⑤⑥⑦）	【活動9】 【振り返り・発表会練習等】 1泊2日を通して、個人・グループの変容や、分かったこと、これからの生活に生かしたいことについて振り返り、個人や集団の成長を実感する。 ☆ESDで育む能力（①②③⑤）
【活動5】 【キャンプファイヤー】 火の暖かさや大切さ、ありがたさを理解し、仲間との交流を深める。 ☆ESDで育む能力（④⑤⑥⑦）	【活動10】 【活動発表会】 振り返りの内容を、保護者に伝えることで、本事業での成長や学びを家族と共有する。 ☆ESDで育む能力（③④⑤⑥⑦）

関連するIKR調査項目が、本事業でめざす参加者の具体的な姿として捉え、これらのことを参加者自身が自他共に共有できるようになることを意識しながら指導にあたる。



事前説明会の様子



アイスブレイキングの様子



SDGsについて学ぶ様子

8 活動の実際

(1) オリエンテーション

初めて会う参加者の緊張を解きほぐし、互いの親交を深めるために、アイスブレイキングを行った。「たし算ジェスチャー」など、協力型、達成型のアクティビティーを設定し、多くの参加者と関わられるようにした。またレクリエーションでは、相互理解を深める「表情リレー」を行った。最後に、事前説明会の際に日本ユニセフ協会「持続可能な世界への第1歩SDG s CLUB」教材を使って環境に関わる世界的課題を学び、本キャンプの行動目標を話し合ったことについて振り返り、全体の行動目標を設定した。

【みんなで話し合ったSDG s キャンプ行動宣言！】

- 1 水、薪、食材を大切に使おう！ 2 ゴミをできるだけ出さないようにしよう！



ジェスチャーたし算をする様子



表情リレーをする様子



行動目標を発表する様子

【参加者の感想】

- 新しい友達に出会って仲良くすることが出来ました。
- 初めて会う人が多い中、友達を素早く作り仲良くすることができました。
- SDG s について考えながらご飯を作りたいです。

(2) クラフト（竹ばしづくり）、火起こし体験・薪割り体験

クラフト（竹ばしづくり）では、SDG s と関連させて竹ばしを作るよさについて触れテーマとのつながりを考えられるようにした。また、ただ作って持ち帰るのではなく、2日目の朝食で実際に使うことで、大切に作る・大切に使う意識を高めるようにした。

火起こし体験では、人間が火を使うようになった歴史や火と人間の生活との関わりについて触れ、日常生活に欠かすことのできないものであることを考えさせた。実際に火をおこす場面では、うまくいかずとても苦労していたが、全員が熱心に取り組んでいた。一方で、今の生活がいかに便利であるかを深く実感することができたようである。

薪割り体験では、野外炊事2回分の薪を準備した。薪を有効に使うために、どの大きさの薪がどれくらい必要かを伝え班で話し合いながら活動を進めた。目的をしっかりとめたことで、1人1人集中して取り組んでいた。



クラフト(竹ばしづくり)の様子



火起こし体験の様子



薪割り体験の様子

【参加者の感想】

- はしを作るのはもちろん楽しかったけれど、その後、実際に使うことが出来たので良かったです。
- 昔の人がどうやって火を起こしているのかなどを知ることができました。
- 薪を大切に使おうと思いました。

(3) 野外炊事（SDG s カレーづくり，SDG s ご飯とみそ汁づくり）

本事業では、野外炊事を2回設定した。1回目はSDG s カレーづくりで、本センターにある調理用具の使い方や調理の方法を学びながら活動を進めた。自分たちで準備した薪はもちろん、水を節約するためにお皿にラップを巻いて使用したり、ゴミをできるだけ少なくしたりするなど、全体の行動目標を意識して取り組むように指導した。1人1人が協力する意識をもてたことで、両班とも行動目標を達成することができ、活動への自信と意欲が高まっていた。

2日目は、SDG s ご飯とみそ汁づくりを行った。カレーづくりとみそ汁づくりは調理方法に共通している部分が多く、みそ汁づくりの流れを簡単に確認した後、全体の行動目標の確認を行った。カレーづくりの経験が生かされ活動がスムーズに進み、おいしく食べることが出来た。少し残食が出たものの、薪の有効利用、節水が意識され、全体の行動目標が達成されていた。

厳冬期の後片付けをスムーズに行うために、グループごとに18Lポリタンク1つ分のぬるま湯を準備した。特に、羽釜や鍋を磨き、洗い流すのに大変有効であった。



ご飯を炊く様子



お皿にラップを巻く様子



グループでの食事の様子

【参加者の感想】

- お皿にラップを巻くやり方を、家でもやってみたいです。
- 残さずに食べることを意識することができました。
- 材料を無駄なく使えて、SDG s を意識できました。

(4) キャンプファイヤー，モーニングウォーク

参加者同士の交流を更に深めるために、「キャンプファイヤー」を行った。火の温もりの中で、静と動の区別、楽しいレクリエーションを仲間とともに行い、一層親交を深めることが出来た。また2日目の朝は、モーニングウォークを行った。寒い中ではあるが、センター内をみんな揃って歩き夜明け前の美しい鹿児島市内の様子を見ることができた。また、キャンプ場には暖をとるためのたき火と温かい飲み物を準備した。たき火を囲んで、

寒い中のテント泊について、参加者の会話が弾んでいた。



キャンプファイヤーの様子



モーニングウォークの様子



たき火を囲んで暖まる様子

【参加者の感想】

- 友達とも仲良くなれたし、身近でできる遊びを知ることができました。
- 言葉がしっかりと聞こえる声で話せるか心配だったけれど、聞こえる声で話せて良かったです。
- 寒かったけれど、きれいな景色を見ることができてよかったです。

9 事業アンケートから

(1) アンケート結果（回答数 14、野外炊事に関しては無答 1）

○ プログラムについて	よかった	まあまあよかった	あまりよくなかった	よくなかった
クラフト活動（竹ばしづくり）、火起こし体験・薪割り体験	12	2	0	0
野外炊事	13	0	0	0
自由交歓、テントでの宿泊	9	5	0	0
○ 参加した感想や、「自分の中で変わったかも」と思うことについて（一部抜粋）				
・ ウインターキャンプに参加して、SDG s のことをよく考えたり、行動が出来るようになったりしたと思います。 ・ 自分の中ですごく成長できた 2 日間だった。外での宿泊や調理などたくさんのことを身に付けることができました。 ・ 自分から動けるようになりました。 ・ 友達と協力できるようになりました。				
○ 子どもさんを参加させて、変化したことや良かったと思うこと（保護者）				
・ 良く周りを見て行動できることが増えたように思います。又、料理や手伝いへの関心が深まった気がします。 ・ 知り合いが 1 人もいない中、また、冬の寒いで 1 日過ごして貴重な体験をさせていただきました。参加後は、「ありがとう」と感謝を伝えることが多くなったようです。日々の生活が当たり前ではないと実感したようです。				

(2) 考察

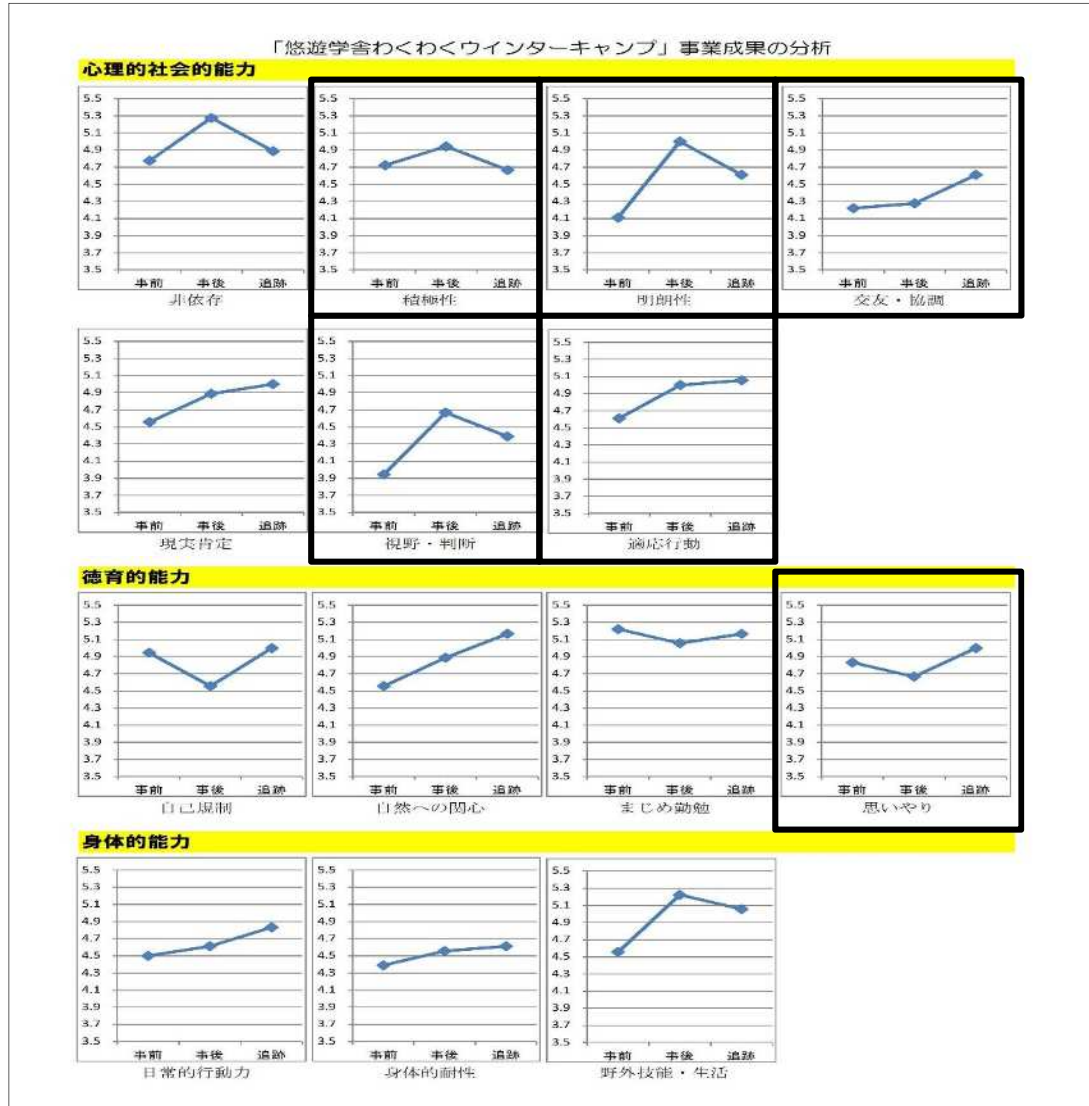
アンケートの結果から、参加者がそれぞれのプログラムに対して概ね満足をしていることが分かった。満足度が低かった参加者は、サマーキャンプに参加した経験から「5泊6日にしてほしい」と回答していた。来年度は2泊3日の日程で内容を含めて更なる充実を図っていきたい。

参加者のコメントからは、SDG s に関する内容ばかりではなく、自分から声をかけることで仲間作りができたこと、積極的に行動できたこと等、自分の変容や成長について実感をもっていることが感じられた。保護者も同様に、積極性や主体性が出てきたことや感

謝の気持ちをもつようになったこと、SDGsへの学びが深まったことについて、参加者の変容を感じとっていたようである。

10 I K R調査から

(1) 調査結果 ※ 太枠は、ESD（持続可能な開発のための教育）と関連する本事業の重点項目



生きる力			平均値		
			事前	事後	追跡
心理的社会的能力	非依存	いやなことは、いやとはっきり言える 小さな失敗をおそれない	4.78	5.28	4.89
	積極性	自分からすすんで何でもやる 前向きに、物事を考えられる	4.72	4.94	4.67
	明朗性	誰にでも話しかけることができる 失敗しても、立ち直るのが早い	4.11	5.00	4.61
	交友・協調	多くの人に好かれている 誰とでも仲よくできる	4.22	4.28	4.61
	現実肯定	自分のことが大好きである 誰にでも、あいさつができる	4.56	4.89	5.00
	視野・判断	先を見通して、自分で計画が立てられる 自分で問題点や課題を見つけることができる	3.94	4.67	4.39
	適応・行動	人の話をきちんと聞くことができる その場にあふさわしい行動ができる	4.61	5.00	5.06
生きる力			平均値		
			事前	事後	追跡
徳育的能力	自己規制	自分勝手な、わがままを言わない お金やもののむだ使いをしない	4.94	4.56	5.00
	自然への関心	花や風景などの美しいものに、感動できる 季節の変化を感じることができる	4.56	4.89	5.17
	まじめ勤勉	いやがらずに、よく働く 自分に割り当てられた仕事は、しっかりとやる	5.22	5.06	5.17
	思いやり	人のために何かをしてあげるのが好きだ 人の心の痛みがわかる	4.83	4.67	5.00
身体的能力	日常的行動力	早寝早起きである 体を動かしても、疲れにくい	4.50	4.61	4.83
	身体的耐性	暑さや寒さに、負けない とても痛いウガをしても、がまんできる	4.39	4.56	4.61
	野外技能・生活	ナイフ・包丁などの刃物を上手に使える 洗濯機がなくても、手で洗濯できる	4.56	5.22	5.06

(2) 考察

本事業における重点項目(ESD との関連項目)として設定した「積極性」「明朗性」「交友・協調」「視野・判断」「適応・行動」「思いやり」の6項目については「思いやり」のみ事前より事後が下回ったものの、概ね高い値を示していた。「交友・協調」「適応・行動」は、1か月後の追跡調査でも上昇し続けている。本事業での成功体験が事業後の日常生活につながり続けているのではないかと考える。その一方で、「思いやり」については事前より事後が下回ったが、追跡では大きく上回る結果となった。更なる分析が必要だと思われるが、短期間のキャンプで十分に達成出来なかったことが、日常生活の課題として参加者の意識が高まり、事業後の生活に生かされている結果ではないか考える。

全体的に見て、テーマに即したプログラム展開や目的意識をもたせる指導が「交友・協調」「現実肯定」「自然への関心」等への大きな変化につながったと考える。

項目	事前	事後	追跡	事後—事前	追跡—事前
積極性	4.72	4.94	4.67	0.22	—0.05
明朗性	4.11	5.00	4.61	0.89	0.5
交友・協調	4.22	4.28	4.61	0.06	0.39
視野・判断	3.94	4.67	4.39	0.73	0.45
適応・行動	4.61	5.00	5.06	0.39	0.45
思いやり	4.83	4.67	5.00	—0.16	0.17
全項目の平均	4.41	4.76	4.72	0.35	0.32

11 成果と課題

〈全ての活動を振り返って〉

指導者と参加者の双方が「SDGs」というコンセプト意識しながら、事業をつくりあげていくことができた。IKRの結果からも事業が所期の目的を達成したと考えることができ、参加者にとっても、保護者にとっても非常に満足度の高い事業であった。

〈成果〉

- 「1人の1歩からみんなの1歩へと広げるSDGsキャンプ」をテーマに2日間のプログラムを編成したことで、今日的課題について、できることを実践しながら、今後の生活に生かす意識を高めることができた。
- 寒い中だったが、マットや寝袋を複数枚使用したり、テント1張あたり4名ずつ編成したりすることで、1人の体調不良者も出すことなく、テント泊を実施することができた。

〈課題〉

- 応募者が定員に達しなかった(参加申し込み総数19, 当日の参加者15)。その原因として、実施時期の問題や活動内容等が考えられる。参加者にとって魅力ある事業内容にするための検討をしていく必要がある。



活動発表会の様子



別れのつどいの様子



記念撮影の様子

【実践事例3】

1 事業名 悠遊学舎 夏のわくわくデイ

2 期 日 令和5年6月4日（日）

3 参加者 小学生24人

4 経 費 600円（保険料50円，活動費550円）

5 事業内容

(1) 事業の趣旨

青少年研修センターの活動プログラムや周辺の自然にふれる体験活動を通して、自然を体感し、自主性や協調性、自己肯定感を養う機会とするために、発達段階を踏まえたやや難易度のある活動を工夫や協力によって解決する活動を中心とした事業となっている。

(2) 事業の特色

本事業は、小学1年生から4年生までを対象にした事業である。仲間づくりや文化創作活動、自然体験活動等を通して上記の趣旨達成を図る。

また、小学5年生から中学3年生までを対象とした「悠遊学舎サマーキャンプ」、「悠遊学舎ウインターキャンプ」の事前事業として位置付けている。

そのため、活動を通して失敗を恐れずに挑戦する姿、仲間に声をかけ協力して取り組む姿、試行錯誤しながら工夫を凝らし最後までやり遂げる姿を目指す子供の姿と位置付け、結果として生きる力の向上・自己肯定感を高めることにより、上記事業をはじめとしたより高い課題に挑戦できるようにする。

(3) プログラムを企画するに当たり

ア 心ほぐし・仲間づくり

入学して間もない小学1年生もおり、学校や家庭以外での活動に対する経験が少ない参加者が多いことが予想されるため、はじめに心ほぐしを行い、場や環境に慣れる活動を行う。

また、グループの編成は、小学1年生から小学4年生までの異年齢集団による活動となる。集団における自己の役割に見通しをもち、他者との関わりを通して得られる喜びを味わえるようにするために、上の学年はリーダーとして周囲に声をかける、下の学年は上の学年を見てまねをしたり手伝ったりするといった、リーダーとフォロワーの観点から発達段階を踏まえた役割や目的を事前に指導する。

イ 個の活動と協働活動

自己中心的な傾向が強い発達段階を踏まえ、どの活動においても個人から協働へ活動が展開できるようにする。まずは、個人での活動を通して自己肯定感を高め、そこで得たものやできたことを協働での活動で生かせるような展開としていく。そのために、各グループに指導者を配置し、声かけ等による評価を継続していくことにより、集団における自己有用感を高められるようにする。

ウ 季節を味わい余白のある日程と内容

梅雨時期であることを考慮し、雨天も想定した内容とする。また、風や鳥のさえずり、雨や空気に匂いを感じるといった、季節を味わう場面や、個人差に対応するために、活動間を十分に確保する。



6 日程

9 : 30～	9 : 45～10 : 30	10 : 30～13 : 30	13 : 30～15 : 00	15 : 00～15 : 50
受付	出会いのつどい オリエンテーション アイスブレイキング	【活動Ⅰ】 わくわくカレー 作り	【活動Ⅱ】 水と遊ぼう 〈水鉄砲作り、水遊び〉	別れのつどい

7 活動の実際

(1) 受付・出会いのつどい・アイスブレイキング

受付時に、本事業のねらいと内容について保護者に周知を図った。オリエンテーションでは、参加者へねらいと内容を説明し、見通しをもち、期待感をもてるよう努めた。アイスブレイキングでは、個人、ペア、集団と徐々に関係を広げながら誰もが楽しめるレクリエーションを実施した。指導者を複数配置し、ファシリテーションや役割演技を通した雰囲気作りや観察を通した実態把握に努めることで、親元から離れた寂しさや初めての場所に対する緊張がみるみるほぐれていく様子が見られた。



アイスブレイキングの様子

(2) 自然体験活動（わくわくカレー作り、水鉄砲作り・水遊び）

発達段階を踏まえ、以下の点について工夫した。

- ・ 職員は、ファシリテーターと各班担当を配置する。
- ・ 意図的な異年齢団を形成し、個人・班で取り組む活動を行う。
- ・ 用具については、刃物等以外を事前に配置する。
- ・ 参加者はルウのみを作るなど、活動を精選する。

職員の役割を分担することで、全体での事前指導は端的に行い、活動中に安全面も含めた個や集団に応じた指導を行うことができた。また、小学1年生から4年生までの異年齢集団を形成することにより、それぞれの過程での役割が自然と生まれ、時には上級生が下級生に挑戦させるなど、教え合う場面を見ることができた。さらに、活動内容を精選し、時間を十分に確保したことにより、参加者一人一人の活動に没頭する時間を確保することができたので、できあがった料理を味わう時間、語らう様子を多く見ることができた。水鉄砲作りでは、やや難易度の高い活動に対し、助言や協力を受けながら製作したものを、遊びの場で試行し、更に調整するなど、関わり合いの中で試行錯誤する姿を見ることができた。最後には参加者も職員も水浸しになりながら笑顔で夏を感じる活動となった。



野外炊事の様子



昼食・団らんの様子



創作活動の様子

【参加者の感想】

- カレーを自分で作ったら、いつもよりおいしかった。
- 新しい友達ができた。一緒に楽しく遊ぶことができた。
- 水鉄砲をもっと遠くへ飛ばしたかった。

8 事前アンケートから

(1) アンケート結果（参加者24名）

(◎とても楽しかった ○楽しかった △あまり楽しくなかった ×楽しくなかった)

	◎	○	△	×
カレー作り	23	1	0	0
水鉄砲作り・水遊び	20	4	0	0

(2) 考察

「とても楽しかった・楽しかった」という結果であった。

カレー作りについては、参加者の発達段階に応じた活動内容を検討した結果、ほどよい難易度であったためと考えられる。

水鉄砲作りについては、自分で作ったおもちゃで季節を味わいながら遊ぶという個々の満足がいくまで試行錯誤する活動ができたためであると考えられる。

全体的には、班担当の職員を配置したで、事前説明をよく聞いたり主体的に活動したりするための、見守りと指導・評価を行う体制ができたことにより、上学年が下学年に助言や補助を行うなど異学年による学び合いが出た際に即座に評価し、参加者が達成感を味わう場を増やすことができたためであると考えられる。



一斉指導の様子



学び合う様子

9 I K R調査から

今回の調査においては、28項目のうち心理的社会的能力から6項目、道徳的能力から3項目、身体的能力から1項目の計10項目に絞り込み、体験活動の展開前と展開後で参加者の変容を比較することとし、1か月後に追跡調査も実施した。なお、通常6段階で評価を行うところを、発達段階を踏まえて4段階の評価とした。

(1) 調査結果（4年生7人，3年生5人，2年生8人，1年生4人）

I K R調査は本来小学4年生以上を対象としている。そのため、小学1～3年生にとっては、発達段階を考慮しながら実施した。



試行錯誤の様子

項目	事前	事後	追跡	事前→事後	事前→追跡	事後→追跡
非依存	3.00	3.58	3.29	+0.58	+0.29	-0.29
積極性	3.25	3.50	3.43	+0.25	+0.18	-0.07
明朗性	2.83	3.46	3.07	+0.63	+0.24	-0.39
交友・協調	3.08	3.54	3.36	+0.46	+0.28	-0.18
現実肯定	3.04	3.17	3.00	+0.13	-0.04	-0.17
適応行動	3.71	3.75	3.71	+0.04	0	-0.04
自己規制	3.04	3.58	3.50	+0.54	+0.46	-0.08
自然への関心	3.67	3.67	3.64	0	-0.03	-0.03
思いやり	3.38	3.46	3.50	+0.08	+0.12	-0.04
野外技能・生活	2.63	3.75	3.79	+1.12	+1.16	+0.04
全項目平均	3.16	3.54	3.42	+0.38	+0.25	-0.12

(2) 考察

ア 事前と事後の比較

1つの項目を除いて、事後のポイントが上回った。最も上昇率が大きかった「のこぎりや包丁を上手に使える（野外技能・生活）」については、経験のなかった・少なかったことを経験して、個人・集団の目的を達成したことにより上昇したと考えられる。

次に大きかった「誰にでも話しかけることができる（明朗性）」については、はじめに行ったアイスブレイキングによる心ほぐしと、小集団による活動による必然的な関わり合いの発生によるものとする。その他の項目も含め、参加者相互の関わり合いと指導者の適切な声かけ等による支援・評価により、自己肯定感を高めることができたと考えられる。

一方で、変化のなかった「季節が変わったことに気付くことができる（自然への関心）」については、事前から値が高く、実施前から自然に対し関心が高い集団であったことと1日開催

という短い期間での実施であったこと、自然に触れる活動が十分ではなかったことが要因として考えられる。

イ 事前と追跡の比較

多くの項目について、追跡のポイントが上回った。最も上昇率が大きかった「のこぎりや包丁を上手に使える（野外技能・生活）」については、事業での経験を家庭生活等でも実践を継続していることが予想できる。

次に大きかった「自分勝手な、わがままを言わない（自己規制）」については、集団で一つの目的を達成する経験が普段の生活にも生かされたのではないかと考えられる。

一方で、「人の話を聞くことができる（適応行動）」「自分のことが大好きだ（現実肯定）」「季節が変わったことに気付くことができる（自然への関心）」については、変化なし、又はポイントが下降する結果となっており、本事業においては、より効果的な指導や体験の場を提供する必要があることが分かった。

ウ 事後と追跡の比較

ほぼすべての項目でポイントが下降しており、生きる力を育むための体験活動の重要性が見える結果となった。しかし、「のこぎりや包丁を上手に使える（野外技能・生活）」については、事後調査よりも上回っており、本事業で経験したことの生活化をどのようにして図っていくかを検討することで、生きる力の継続的な向上を目指すことができるということも分かった。

10 成果と課題

(1) 全ての活動を振り返って

本事業においては、日常生活においても経験する食と遊びについて、自力や協働によって解決を図る場を計画した。経験のあるものやないもの、経験が少ないものに対して、個の工夫や協働による工夫を通して解決する体験により、生きる力の向上に繋がれることが分かった。

(2) 成果

○ 異年齢集団を編成し、班ごとに担当指導者を配置したことにより、参加者は実態に応じた適切な支援・評価を通して、主体的・協働的に活動に取り組み、達成感を味わうことができた。

(3) 課題

- 水鉄砲作りでは、製作に時間と支援が多く必要になり試行の時間が短くなるなど、やや難易度が高く感じる参加者もいたため、活動内容については慎重に検討する必要がある。
- 「自然への関心」について上昇を図るために、より自然に触れる活動を検討する必要がある。

【参考事例4】

- 1 事業名 悠遊学舎 秋のわくわくデイ
- 2 期 日 令和5年11月12日（日）
- 3 参加者 小学生39人
- 4 経 費 600円（食材費550円，保険料50円）
- 5 事業内容

- (1) 事業の趣旨

県立青少年研修センターでの体験活動を通して、自然に親しむとともに、自主性や協調性を育み、自己肯定感を高める。

- (2) 事業の特色

本事業は、小学1年生から4年生を対象とした事業である。一般的に、低学年の発達段階は自己中心的な傾向があり、活動範囲や身近な人との関わりが限定的であると考えられている。一方で、中学年になると、相手の気持ちを考えながら行動できるようになり、活動の範囲が広がり、集団を意識するようになって考えられている。発達段階が異なる集団での様々な活動での、「やってみたらできた」や「初めて会った子と友達になれた」などの経験が、参加者の自己肯定感を高める機会となると考える。

また、いも掘り体験や焼きいも作り体験、遊び体験なども、自然に親しみ、秋の季節を感じさせる場となっている。

- (3) プログラムを企画するに当たり

- ア 調理体験の工夫

調理の活動に「ピザ作り」を行うこととした。参加者の発達段階を考慮し、調理体験を、「包丁を使って具材を切ること」と「切った具材をトッピングすること」に設定した。また、段ボールで作ったピザ窯（段ボールオーブン）で焼き上げることで、身近にある物を活用することの良さを体験できるようにした。

- イ 遊び体験の工夫

わくわくタイム②の遊び体験では、かっとい車や草スキーなど、様々な遊びコーナーを設定した。これまでの同事業では、全員で1つの活動に取り組むというスタイルでプログラムを設定していることが多かったが、遊び体験では、参加者自身がやりたいと思うことを主体的に選択して活動に取り組めるようにした。

- ウ 活動形態の工夫

わくわくタイム①とクッキングタイムでは、異年齢で構成されたグループで活動することにより、協力することの大切さやよさを味わわせるようにした。また、わくわくタイム②はグループを解いて個別の活動とし、ひとりひとりが思う存分楽しい時間を過ごせるようにした。このように、プログラムにより活動形態を変えることで、本事業の趣旨にもある自主性と協調性を育めるようにした。

- エ 場の設定と時間の設定の工夫

小学1年生から4年生が対象の事業ということもあり、過去の事業では「想定以上に移動等に時間を要した」という反省があがっていた。そこで、これまで利用していたキャンプ場（炊飯棟）を利用せず、活動範囲を研修棟付近に集約することにした。併せて、プログラムとプログラムの間に、移動・休憩の時間を設定することで、ゆとりのあるプログラム構成とした。

- オ 青少研ボランティアの活用

参加者の発達段階や活動の内容を考慮し、より安全に事業を運営することができるよう、高校生以上の登録者にボランティアを依頼した。当日は、3人の高校生から協力を得ることができた。

6 日 程

9:15~9:30	9:30~9:45	10:00~10:45	11:00~13:45	14:00~15:00	15:15~15:30
受付	出会いのつどい オリエンテーション	わくわくタイム① (いも掘り体験)	クッキングタイム (ピザ作り、焼きいも体験)	わくわくタイム② (遊び体験)	別れのつどい

7 活動の実際

(1) いも掘り体験、焼きいも体験

秋を味わう活動として、いも掘りと焼きいも作りを行った。いも掘りでは、それぞれのグループで協力しながらサツマイモを掘った。初めていも掘りをする参加者も多く、土の中から大きなサツマイモが出てきたことに興奮している様子が見られた。焼きいもは事前に準備していたサツマイモを使って行った。濡らした新聞紙とアルミホイルでサツマイモを包み、炭で焼くという簡単な工程ではあるが、1, 2年生の中には、新聞紙とアルミホイルで包むことが難しい参加者がおり、上級生と一緒に手伝っている姿も見られた。



いも掘りの様子



グループで記念撮影



焼きいもづくり

(2) クッキングタイム「ピザ作り体験」

ピザ作りは、具材を切り、市販のピザ生地にはトッピングをするという簡単な調理である。発達段階を考慮して、具材はピーマンやウインナーなどの比較的切りやすいものとした。包丁を扱うのが初めての参加者も多くいたが、担当職員や青少研ボランティアのサポート、何よりも同グループの参加者同士で積極的に声を掛け合っていたことにより、全員が楽しそうに調理に取り組んでいた。トッピングまで終えたグループごとに段ボールオーブンでピザを焼くのだが、焼き上がりを待つ間も、役割分担をして、包丁を片付けたり、テーブルや椅子の準備をしたりしていた。火傷防止のため、ピザの出し入れは職員が行ったが、初めて見る段ボールオーブンでピザが焼けていく様子を、参加者は興味深そうに見つめていた。食事中も、グループの参加者同士で談笑をしながら交流を深めている姿が見られた。クッキングタイムまでをグループの活動としたことで、初対面の参加者同士であっても、自然と協力をしたり話をしたりすることができたようである。



包丁で具材を切る様子



段ボールオーブンで焼き上げ



できあがったピザを丸かじり

(3) わくわくタイム②

わくわくタイム②では、さくらの園で「草スキー」、「かっとい車」、「フライングディスクゴルフ」、「スラックライン」、「竹馬・竹ぼっくり」、「マウンテンバイク」のコーナーを設定した。どのコーナーも、日頃できないような活動で、参加者も興味深そうだった。また、個別の活動としたことで、全てのコーナーを回ろうとする参加者もいれ

ば、1つのコーナーで繰り返し遊ぶ参加者もいた。自分がやりたい活動を自由に選択できる場面を設定したことで、参加者ひとりひとりが主体性を存分に発揮することができたようである。



かっとい車



竹馬・竹ぽっくり



スラックライン

8 事業アンケートから

(1) アンケートより

○ 事業全体の満足度… 平均 99.1 点 (内訳 100 点 30 人 99 点 5 人 95 点 2 人 90 点 2 人)				
○ プログラムについて	よかった	まあまあよかった	あまりよくなかった	よくなかった
いも掘り体験	33	6	0	0
ピザ作り、焼きいも体験	34	5	0	0
遊び体験	34	5	0	0
○ 参加した感想 (参加者) ※抜粋				
・ピザと焼きいもがおいしかった。友達がたくさんできた。 ・いろいろなものに挑戦して楽しかった。 ・いも掘りを班で力を合わせてできたので、うれしかった。 ・いつもできないことをやり、知らない友達と仲良くなれたので、とても楽しかった。				
○ 子どもさんを参加させて、変化したことや良かったと思うこと (保護者) ※抜粋				
・包丁の握り方等教えてもらったことを楽しそうに話してくれた。 ・自分からご飯を作る手伝いをしてくれるようになった。 ・草スキーや竹馬等初めての遊びは、難しかったけど、新鮮で楽しかったと話していた。 ・知らない子どもたちとも自然と交流ができるようになっていくのを感じた。 ・最初は不安だったけれど、参加したら、楽しかったという満足感を味わうことができたと思う。新しいことにチャレンジするハードルが少しは低くなったかもしれない。				

(2) 考察

アンケートの結果から、事業全体を通して、また、それぞれのプログラムに対しても、参加者が概ね満足していることが分かった。満足度が 100 点でない理由については、「もっと時間がほしかった」というものがほとんどであった。感想については、それぞれの活動に対して「楽しかった」という記述が多かったが、それらの中でも、初めて出合った人と友達になれたうれしさや調理でおいしいピザを作れたこと、初めて挑戦した遊びがうまくいったことの喜びなどについて記述している参加者もいた。

また、本事業では保護者にも事後のアンケートを行った。「自分のことを自分でやるようになった」、「自分に自信がもてるようになった」という旨の感想が多く見られた。

様々な活動を通して、挑戦したり協力したりする経験を積むことで、参加者、そして保護者も何かしらの変容や成長を感じ取ることができたようである。本事業の趣旨にある「自主性や協調性を育み、自己肯定感を高める」ことは、概ね達成できたと考える。

9 I K R調査から

小学1年生から4年生という発達段階を踏まえ、本事業においては、28項目の内、心理的社会的能力から6項目、徳育的能力から3項目、身体的能力から1項目の計10項目に質問を絞り込み、本来の6段階から4段階評価に変更して実施した。

(1) 調査結果

生 き る 力		平 均 値				
心理的社会的能力		事前	事後	追跡	事後-事前	追跡-事前
	自分から進んで何でもやる	2.79	3.44	3.17	0.65	0.31
	小さな失敗を恐れない	2.92	3.62	3.14	0.70	0.22
	誰にでも話しかけることができる	2.63	3.39	3.11	0.76	0.48
	誰とでも仲良くできる	2.73	3.53	3.47	0.8	0.74
	自分のことが大好きだ	2.97	3.46	3.36	0.49	0.39
	人の話をきちんと聞くことができる	3.58	3.77	3.19	0.19	-0.39
徳育的能力						
	自分勝手な、わがママを言わない	3.16	3.69	3.14	0.53	-0.02
	季節が移り変わったことに気付くことができる	3.05	3.64	3.28	0.59	0.23
	人のために何かをしてあげるのが好きだ	2.95	3.26	3.42	0.31	0.47
身体的能力						
	のこぎりや包丁などを上手に使える	2.97	3.69	3.28	0.72	0.31

(2) 考察

全ての項目において、事後を事前が上回った。特に、「自分から進んで何でもやる」、「小さな失敗を恐れない」、「誰にでも話しかけることができる」、「誰とでも仲良くできる」、「のこぎりや包丁などを上手に使える」は、ポイントが大きく上昇した。活動内容や活動形態を工夫してプログラムを構成したことで、参加者がそれらの項目について達成感を味わうことができたと考える。さらに、「誰とでも仲良くできる」は1か月後の追跡調査においても、高いポイントを示しており、本事業において、学年が違う様々な学校の参加者と交流した経験が、日常での学校や地域、家庭での生活にも生きているのかもしれない。

10 成果と課題

〈全体を振り返って〉

段ボールオーブンを活用したピザ作りや遊び体験コーナーでのマウンテンバイクの活用やスラックラインなど、これまでに実績のない活動を多く取り入れたために、当日までが試行錯誤の繰り返しではあったが、事業の趣旨や各プログラムのねらいを明確にし、それらに基づいて事業を運営することができた。アンケートやI K Rの結果からも、本事業が、参加者と保護者にとって満足度の高い事業であり、所期の目的を達成したと考えることができる。

〈成果〉

- 活動内容や活動形態（グループ/個別）を工夫することで、参加者が全体を通して事業を楽しむとともに、「友達をつくることができた」、「初めてのことに挑戦することができた」などの、達成感を味わうことができた。
- 活動範囲をコンパクトに設定したり、移動や休憩の時間を明示して日程を計画したりしたことにより、参加者が慌てることなく、時間にゆとりをもって活動に取り組むことができた。ゆとりがあることで、参加者同士、自由に交流する場面も多く見られた。

〈課題〉

- 「I K R」では、「人の話をきちんと聞くことができる」の結果が低かった。小学1年生から4年生という発達段階も考慮し、本項目についても、参加者がその大切さに気付き、自己の成長を実感できるような手立てを考えていく必要がある。

4 研究のまとめ

体験活動は、意図的かどうかを問わず、直接自然や人・社会等とかかわる活動を行うことにより、五感を通じて何かを感じ、学ぶ取組を広く包含しているといえる。体験活動の定義については、平成19年の中央教育審議会答申において、主として「体験を通じて何らかの学習が行われることを目的として、体験する者に対して意図的・計画的に提供される体験」とされており、特に社会教育や学校教育の場で提供される場合は、教育的な目的・効果を考慮して体験活動を進めている。(中略) また、体験活動そのものを目的とする場合と、体験活動を手段として何かを学び取らせる場合を区別しながら、検討することが必要である。」としている。

学習指導要領や教育振興基本計画において、体験活動の充実や体験活動の機会の確保等が明記されている中、本センターにおいても、体験活動の拠点であることを自覚し、受入事業、主催事業において、I K R調査を用いて、体験活動の有用性を検証、その傾向を把握することで学校へアプローチし、工夫・改善につながると考え、本研究を進めてきた。

受入事業や主催事業においては、新型コロナウイルス感染症の影響が解かれ、子供たちにとっては、自然体験や社会体験の機会が増加する年となった。しかし、それまでの3年間、学校は集団宿泊学習を実施するものの、実施形態や規模を縮小するなどしてきた。元通りとはいかないが、体験活動プログラムを編成し、子供たちの「生きる力」の向上を目指して、本センターを利用している。本センターとしても、受入事業と主催事業を通して質の高い直接体験を提供するという青少年社会教育施設の役割や重要性を自覚しながら、プログラムのねらいに即して、活動を展開し、今年度も研究を推進することができた。

集団宿泊学習におけるI K R調査では、調査対象校をより増やしたことで、より平均化したデータを蓄積することができた。その結果を活用し、校種別、泊数別、宿泊形態別の実施形態に応じた傾向を得ることができ、実施形態別「生きる力」の向上を確認するとともに、集団宿泊学習の有用性を検証することができた。特に野外活動の体験活動プログラムに特化した傾向を得ることができた。次年度においては、多くのI K R調査の結果をもとに、「心理的社会的能力」をはじめとするどの分野に注目してプログラム活動を展開するのか学校と連携して臨みたい。「生きる力」の向上と個別の体験活動プログラムとの因果関係について検証したり、集団宿泊学習においても主催事業「悠遊学舎シリーズ」のように追跡調査まで実施したりすることで、参考資料としてはあるが、さらに詳細な分析ができるよう研究を進めたい。

主催事業「悠遊学舎シリーズ」では、時期的に猛暑や寒波による影響を受け状況もあった。そのような中、事業全体を貫くねらいである仲間づくりを通して、コミュニケーション能力の向上を達成することができた。また、これまでの研究の蓄積から得た成果や課題を参考に、今年度も研究の積み重ねをすることができた。I K R調査の結果からも、「体験活動」と「生きる力」の関連性を検証することができ、事業に対する成果を確認することができた。次年度においては、今年度の取り組みを深化すると同時に、施設を生かした体験活動を実施することで、より現代的課題に応じた事業が展開できるよう

研究を進めたい。

教科と関連付けた活動プログラムについては、令和2年度から継続してきた教育課程への位置付けを意識して、各教科、特別活動との関連をもたせた単元指導案を活用した。指導案の検証においては、2校との連携により、指導案を活用した展開を行うことができた。2校とも教育課程への位置付けに対し、前向きであり成果と課題も見出すことができた。次年度においては、この単元指導案について学校との連携・協働を更に進め、検証を積み重ねることで、12の指導案の見直しを行い、工夫・改善していくことで、教育課程に位置付けしやすく、学校にとってより使いやすいもの、教員が取り入れやすいものにできるよう研究を進めたい。

最後に、新型コロナウイルス感染症対策については、今後、基本的な感染症対策を行うものの緩和していく。本センターとしても、利用者数の減少という課題が続いてきたが、受入事業においては来年度は回復が見込めると考えられる。with コロナ時代の本格的な到来を受けて、受入事業、主催事業、それぞれ利用者の目的達成のために、本センター職員として、さらに教育効果の高い体験活動の提供を目指し、資質向上、スキルアップを図りたい。同時に、教育振興基本計画等、国・県等の動向を注視し、研究テーマに基づいた研修を積み重ねていくことができるよう臨みたい。

プロジェクト研究を通しての職員の感想

- 多くの学校の協力で、I K R調査の対象校（泊数別、規模別、宿泊形態等）を広げられ、体験活動の有用性を立証できるデータ収集の機会となった。
- I K Rのデータ抽出については、年度初めに方針が打ち出されよかった。野外活動に注目できた。
- 単元指導案の活用について、学校と連携しながら満足度を高めるために、質的な面に注力した方が効果的と考える。
- より研修生の「生きる力」を向上させるために、どの分野に注目するのか団体ごとの課題の把握など連携をしっかりと進める。

Ⅲ スキルアップ研修

1 本センターの職員の現状と課題

本センターで研修指導に関わる職員の内、青少年社会教育施設での経験がある職員より、赴任が初めてという職員が多い。また、新型コロナウイルス感染症の影響が長引く中、その指導回数も減少しており、活動プログラムを担当して展開する機会が少なく、経験のある2年目以降の職員にとっても思うようにスキルアップが図られていないという現状にある。

2 スキルアップ研修の必要性

プログラム等の指導回数が減少しているということは、指導経験のない活動プログラムや作業にあたる不安が増すこととなる。青少年社会教育施設職員としての役割を果たし、利用者のニーズに応えるためにも資質向上は必要不可欠である。

そこで、新任者研修を含め、OJT形式等で行われる自主的な研修を行いながら、本年度も計画的に研修を実施できるよう、「スキルアップ研修」を実施することとした。さらに今年度は、他施設との合同スキルアップ研修を行い、相互研修を行うことで、学び直しや、スキルを高める機会を設けた。

研修内容については、センター職員の実態や研修課職員のアンケート等を基に設定した。また、研修の講師は、職員を計画的に割り振って行った。

3 スキルアップ研修の実施内容

回	月 日	研修項目	研 修 内 容 等
1	4	10 プログラム指導の習熟	・ 野外炊事と食堂利用（食材受渡し）
2		17 施設の管理	・ 環境整備のための農作業機械の使い方
3	5	13 プログラム指導の習熟	・ テント設営・撤収とキャンプファイヤー
4		26 プログラム指導の習熟	・ Instagram の使い方・HP 作成について
5	6	6 専門職員としての知識	・ 光学機器の使い方
6		23 プログラム指導の習熟	・ レクリエーションについて
7	7	11 専門職員としての知識	・ 主催事業で使える野外調理メニュー
8	8	4 プログラム指導の習熟	・ センターで見かける動植物
9	9	19 プログラム指導の習熟	・ 陶芸及び灯油窯の取扱について
10	10	16 専門職員としての知識	・ 電動工具の使い方
11	11	24 プログラム指導の習熟	・ 文化創作活動演習「クリスマスリース」作り
12	12	20 プログラム指導の習熟	・ 文化創作活動演習「正月（門松）飾り」作り
13	2	7 専門職員としての知識	・ フィールドワーク（鹿児島島の地理と歴史）

野外炊事と食堂利用

1 ねらい

本センターの活動プログラムの1つである「野外炊事」について、準備から片付けまでの一連の流れや効果的な指導のポイント、安全上の留意点など、実際の活動を通して学ぶことで、自信をもってプログラム指導にあたることができるようにする。

2 期日

令和5年4月10日（月）

3 研修内容

(1) 学校（引率）職員との打合せについて

学校（引率）職員の役割分担や、主体性をもって指導に取り組んでもらえるようにするための説明や指示の出し方、打合せ資料の作成などについて共通理解を図った。

(2) 指導上のポイント、安全上の留意点について

限られた時間での指導の効果を高めるためのポイントや、刃物や火の取り扱いなど安全上の留意点について学習し、炊飯活動を通してそれらの点について確認をした。

(3) 準備と片付けについて

食器と調理器具、指導で用いる道具等の事前の準備や、片付けをする際の点検の仕方などについて、共通理解を図った。



調理法の説明の仕方



かまどの使用について



炊飯活動（カレー作り）

4 職員の感想

- 活動時の安全指導について、念入りに説明されており参考になると同時に、指導内容を確実に伝えることや支援の在り方について再確認することができた。
- 活動後の振り返りで、残食（生ゴミ）を用いて食品ロスについて触れていたことが、参考になった。

5 成果と課題

- 役割分担毎に丁寧な説明と安全指導を徹底することの大切さを確認することができた。
- 実際の指導や調理を体験し、その場その場で意見を交わしながら研修を行うことで、新任の職員だけでなく、経験のある職員にとっても学び直しの機会になった。
- 団体の発達段階や規模に応じて、より効果的な指導を行えるよう、今後各職員がOJTで研修を進めていく必要がある。

環境整備のための農作業機械の使い方

1 ねらい

本センターで所有する農作業機械の操作方法やメンテナンス、取り扱い方を習得し、安全に効率よく環境整備に従事できるようにする。

2 期日

令和5年4月17日（月）

3 研修内容

(1) 刈払機、ブロー使用時の留意事項確認

操作前の安全確認後、紐や刃の取付け方、起動の仕方、安全に操作するためのポイントや、使用後のメンテナンス等の共通理解を図り、実際に起動させる体験を行った。

(2) 乗用草刈り機の使用時の留意事項確認

乗用草刈り機を使用する前の点検の仕方や操作方法について確認した後、実践を交えながら効率的な草刈りの仕方について学んだ。その後、新任者を中心に実際に試乗して、芝生の草刈りを行った。

(3) 実践

留意事項等の説明後、実際に刈払機や乗用草刈り機を使い作業を行った。効率的に草を刈る方法や使用後の整備や点検等について職員同士で声を掛け合いながら体験することができた。

(3) 燃料の計量と記載の仕方確認

使用する農機具の燃料の種類と計量の方法、記録簿への記載の仕方について共通理解を図った。



紐の取付け（刈払機）



乗用草刈り機の点検

4 職員からの感想

- 作業前の具体的な点検箇所の確認ができたので、作業前・作業後の確認を行う癖をつけて作業に取り組んでいきたい。
- まずは、安全第一を考え、けがや事故が起こらないように十分注意を払って作業を進めていきたい。

5 成果と課題

- 年度初めに農作業機械をはじめ、環境整備に係る共通理解ができたことは、作業を安全かつ円滑に進めるために有意義であった。
- 農機具の整備まで意識して作業を行うことで、より安全に環境整備ができることを職員が共通理解することができた。
- 今回の研修で取り扱っていない農作業機械があるので、使用する前には、安全で正しい使い方について研修を行う必要がある。

テント設営・撤収とキャンプファイヤーの指導

1 ねらい

キャンプ活動で基本の一つであるテント設営・撤収とキャンプファイヤーの指導のポイントについて、職員の共通理解を図るとともに、これまでの指導方法について見直しの機会とする。

2 期日

令和5年5月13日（土）

3 研修内容

(1) テント設営の指導

テント設営の手順やポールを差し込む際の安全確保について確認した。テント入り口は、キャンプサイトの状態や避難を想定した際に適した向きを確保することを共通理解することができた。



テント設営の様子

(2) テント撤収の指導

テント撤収を行う際の手順を確認しながら、インナーテントやフライシートの効果的なたたみ方及びポールやペグの収納方法を確認することができた。



テント撤収の様子

(3) キャンプファイヤーの指導

キャンプファイヤーで使用する道具や、事前打合せについての確認を行った。また、安全指導の徹底について共通理解を図ることができた。



キャンプファイヤーの道具確認

4 職員の感想

- テント設営や撤収、寝袋の使い方についての指導内容やポイントについて詳しく学べた。
- 限られた時間内での活動になるので、安全面に留意しながら指導するポイントを絞り、利用者の活動時間をいかに確保するかが大事だと分かった。

5 成果と課題

- 指導者によって指導の仕方が異なる部分を洗い出すことができ、職員で共通理解・共通実践していく確認が取れた。
- 指導マニュアルに載っていない、指導に関する細かい部分を理解することができた。
- 活動中の安全確保に向け、職員の事前指導のスキルアップと、引率者を巻き込んだ指導体制の構築が重要になる。
- テント設営・撤収やキャンプファイヤーは、指導力向上のため、今後とも定期的に研修をする必要がある。

Instagramの使い方・HPの作成について

1 ねらい

Instagramの使い方を研修することにより、効率的な広報につなげる。HP作成について基本的な操作手順を確認し、共通理解を図る。

2 期日

令和5年5月26日（金）

3 研修内容

(1) Instagram活用について

Instagramの本格的な活用については、本年度が初年度であったため、Instagramを活用する意味や、具体的な活用場面についての共通理解を図った。

その後、投稿の仕方やハッシュタグの付け方等の基本的な操作方法について確認した。

Instagramの特徴である即時性を利用し、センターの自然の状況（サクラの開花、紅葉状況など）を発信したり、子供だけで参加する事業において、子供たちが活動している様子を発信したりすることで、利用者が知りたい情報や状況を提供できることを確認した。また、ハッシュタグを活用することにより、今まで本センターの事を知らなかった県民の方々に届く投稿ができることも確認した。



研修資料

(2) HP作成について

年度当初であるため、HPを作成するための基本的な操作方法や、共通理解事項について確認を行った。

4 職員の感想

- 県民の方々に本センターの事を知っていただくきっかけとして、Instagramが有効であることがよく分かった。積極的に活用していきたい。
- 今まで、天候による主催事業の中止について利用者の方にお知らせするのが難しい面もあったが、Instagramを活用することで、リアルタイムで伝えられるようになったと思った。活用していきたい。

5 成果と課題

- InstagramとHPの基本的な操作方法について理解を深めることができた。
- 利用者増のためのInstagramへの効果的な投稿については、具体的ではない。取組を進めながら考えていきたい。

光学機器等の使い方

1 ねらい

本センターの野外活動及び自然活動の活動プログラムである星の観望について、天体望遠鏡の操作（新旧2タイプ）の共通理解と「天文シュミレーションソフト」の活用を図る。

2 期 日

令和5年6月6日（火）

3 研修内容

(1) 理科「天文分野」学習内容の確認

宿泊学習の夜の研修で、星空観望の研修を行う場合が多い。そこで、小中学校の理科の学習内容では、星座や星などを、どの時期に扱っているのかを確認した。

(2) 天体望遠鏡操作(新旧)

望遠鏡の基本的な構造と名称を確認し、鏡筒の中央とファインダーの調整の基本操作を行った。赤道儀の極軸あわせの方法も確認し、自動追尾の機能を活かせるよう新しいタイプの天体望遠鏡も実見した。

(3) 「ステラナビゲーター」の活用

本センターの経緯と標高を初期設定画面で入力し、年月日時刻の設定することで利用できることを確認した。さらに、恒星・星座・惑星・衛星の表示設定や皆既月食など天文現象や星空自動解説番組等を活かすプログラムの展開を確認した。



研修資料

4 職員の感想

- 天体望遠鏡を実際に操作し、機能を有効に活用することを確認できた。施設ならではの夜の学習の星空観望時の指導に存分に使用したい。
- 天体望遠鏡の初期設定が昼の時間でないと調整できず、夜の星では調整が難しいことが確認できた。ただ、実際に夜の時間帯での使用感はつかみずらい面があるので、工夫をしたい。また、研修生が学習している内容に即して学びを深められるような星空観望にしていきたい。



天体望遠鏡操作の様子

5 成果と課題

- 天体分野の学習内容や「ステラナビゲーター」の効果的な使い方を確認できた。
- 天体望遠鏡の機能を十分理解し活用することで、利用団体に還元できる。
- 天体望遠鏡の操作については、時間を見付けて積極的に使用し、自己研鑽を深めていく必要がある。

プログラム指導の習熟「レクリエーション」について

1 ねらい

本センターの活動プログラムの1つである「レクリエーション」について、活動の流れや効果的な指導のポイント、新しい内容など、実際の活動を通して学ぶことで、自信をもってプログラム指導にあたることができるようにする。

2 期日

令和5年6月23日（水）

3 研修内容

(1) 「レクリエーション」の内容について

青少年研修センターでは、主としてアイスブレイクを行うものを「レクリエーション1」、室内で体を動かしながら行うグループワークトレーニングを「レクリエーション2」とすることを確認した。

(2) 新しいレクリエーションプログラムの体験

ア 「レクリエーション1」について

- ・ セブンイレブンじゃんけん

イ 「レクリエーション2」について

- ・ 魔法のじゅうたん
- ・ 表情リレー

4 職員の感想

- 対戦型のレクリエーションではなく、互いに力を合わせるような内容は、対立を生む事がなく、望ましいと感じた。
- セブンイレブンじゃんけんでは、人数を増やしたり、課題を難しくしていったりするなど、発展的させていくことができると思った。
- コロナ禍の中、マスクで友達の顔を見る機会が少ない中で、表情で感情を知ることが、望ましい人間関係づくりを進める上で、とても役に立つと感じた。



様々な方法を話合う様子



シートから落ちないように裏返す様子

5 成果と課題

- 研修プログラムである「レクリエーション」について、本センターの定義、その内容と進め方を研修課の全員で確認することができた。
- 「職員指導マニュアル」の中に無い新しいレクリエーションを体験することによって、研修団体に提供できる内容を増やすことができた。各種目に振り返りの視点が書かれているので、指導に役立てやすくなっている。
- 研修団体の年齢層や人数に対応するため、レクリエーションの数を増やしたい。

主催事業で使える野外調理メニュー

1 ねらい

本センター主催事業等で野外炊事メニューを提供する機会が多いため、新メニューを検討するとともに、活動時の指導のポイントや用具使用や安全面等に関する留意点を共通理解する機会とする。

2 期日

令和5年7月11日（火）

3 研修内容

(1) 準備について

まず、本センターにある用具の確認と点検を行った。使用頻度の少ない道具について活用法の提案も含め、ハンバーガー作りを提案した。

次に、ハンバーガー作りに必要な用具を確認した。

(2) 野外炊事の実際

研修の実際を想定し、小グループを編成し役割を分担した上で活動を行った。

様々な主催事業ではどのように活用できるか、指導のポイントは何かなど意見を交換しながら活動が進められた。

4 職員からの反省

- なじみのあるメニューであるにも関わらず、ハンバーガーを調理して作る機会があまりなかったが、簡単に調理できるメニューであったため、主催事業に生かしていきたいと思った。
- ハンバーガーを作ること自体にイベント感があり、友達同士はもちろん、家族で作るなど様々な場で実践できそうな内容であった。
- 野外活動と関連付け、不公平感のない範囲で具材などを選んで作る活動も期待できると感じた。

5 成果と課題

- 野外炊事において新たな視点を得る機会となり、主催事業等における野外炊事検討の参考となる研修をすることができた。
- 様々な年齢層に対して達成感が得られるようにするために、更に広い視点で野外炊事を捉え、研修を深めていく必要がある。



研修資料



調理の様子



盛り付ける様子



試食の様子

センターで見かける植物

1 ねらい

植物の名称（名前の由来）や特徴，似ている植物の見分け方などについて，フィールドワークでの学びを通して理解を深め，職員の自然に対する興味や関心を高める機会とする。

2 期日

令和5年8月4日（金）

3 研修内容

東ピロティ，梅園，記念植樹園をフィールドに，クイズなどを通して植物の特徴や名前の由来，似ている植物との見分け方などについて学びながら，観察活動を行った。自分の目で細かい部分まで見ることに加え，葉や花の部分に触って感触を確かめたり，匂いを嗅いだりするなど五感を使って観察をすること，スマートフォンのアプリを使って植物を判別することなどにも取り組んだ。



記念植樹園での活動の様子



研修資料より



スマートフォンのアプリでツバキの葉を調べる様子

4 職員の感想

- 身近にあり，よく知られている植物でも名前の由来までは知らなかった。今回学んだことを，主催事業を企画する際に生かしていきたい。
- それぞれの植物の特徴や季節によって様子が異なることを知ることで，日常でも植物を意識して見るようになるのではないかと感じた。

5 成果と課題

- 身近にある植物について，名前や特徴などについて学ぶことができた。
- 主催事業やクラフトで使用する自然素材について，木の種類や実が付いている状態がどのようなになっているか，どのように採取するかなどについて共通理解を図ることができた。
- 自生しているものや名札がとれているものなど，種類を特定することが難しい植物もある。博物館連携事業等を活用できれば，職員の知識もより深まると思われる。

陶芸・灯油釜の取扱について①・②

1 ねらい

本センターのプログラムの一つである「陶芸」は、陶芸団体が自主研修で行うことがほとんどであるため、ほとんどの職員に指導の経験がない。そこで、作陶から釉薬がけまでの一連の活動を体験したり、灯油釜の使用法について学んだりすることを通して陶芸について知り、プログラムの指導につなげる。

2 期日

① 令和5年9月19日（火） ② 11月22日（水）

3 研修内容

(1) 研修① 演習「作陶」

「成形→乾燥→釉薬がけ→本焼き」という完成までの一連の流れと、使用する道具やその使い方について説明した。

その後、実際に作陶を行った。職員は、手びねりや板づくり（たたら）による成形を行い、思い思いに作品作りに取り組んでいた。

(2) 研修② 演習「釉薬がけ」

素焼きと本焼きの違いや、灯油釜の使用法、釉薬のかけ方などについて説明した。

釉薬がけでは、焼き上がりの色をイメージしながら、各自の作品に釉薬がけを行った。



作陶の様子



素焼き前の作品



灯油釜の使用法についての研修

4 職員の感想

- 実際の作陶から釉薬がけを体験することで、一連の流れを理解することができた。指導に生かしていきたい。
- 魅力的なプログラムであることが改めて分かった。利用者増につなげていきたい。

5 成果と課題

- 演習を通して、作陶の手順や指導のポイントについて確認することができた。
- プログラムとして選択される機会が少ないため、今後は陶芸の魅力を伝えることで、利用者増につなげていきたい。

電動工具の使い方

1 ねらい

文化創作活動や野外活動施設の補修，主催事業の準備などで使用する電動工具の正しい使い方を学び，実際に使用することで職員のスキルアップを図り，正確・安全且つ効率よく作業できるようにする機会とする。

2 期日

令和5年10月23日（月）

3 研修内容

(1) 電動工具使用時の留意事項及び使用方法

使用する際の心構え，安全に作業するための留意事項，保管の仕方等を確認したあと，本センターにある電動工具（13種類）を使用目的別に並べ，資料をもとに工具の使用方法や使用時のポイントなどを確認し合いながら共通理解を図った。



高速切断機(木材切断)

(2) 実習・安全指導

電動工具の特徴や正しい使い方を確認し合った後，実際にそれぞれの使用目的に分かれて作業を行った。電動工具の中でも，木材等を切断する時に使用する卓上スライドソーや高速切断機を使用するときは，活動場面を想定しながら，二人組をつくって作業を行った。様々な電気工具を使いながら，さらに安全意識を高くもち，職員同士で学び直しを行うことができた。



ドリルドライバー(穴開け)

4 職員の感想

- 本センターにある工具を実際に見て触って確認することができた。
- 電動工具の正しい使い方を再確認することができた。
- 安全に作業をするためには，電動工具を使う前に作業場所周辺の環境を整え，作業に適した服装と装備品を整え，使用後の整備まで想定した作業時間の設定が大切だということについて，学び直す機会となった。

5 成果と課題

- 電動工具の特徴を知り，安全に使用するためのポイントを学ぶことで，効率的かつ安全に作業を進めることができることを再確認することができた。
- 電動工具の安心・安全な扱い方を，実習を通して学び直す機会を複数回設定する必要がある。

文化創作活動演習「クリスマスリース・ミニクリスマスツリー」作り

1 ねらい

主催事業「自然素材で作るクリスマスリース・ミニクリスマスツリー」の事前研修として、自然素材採取場所、クリスマスリース・ミニクリスマスツリー作りの手順や制作ポイントの確認を行うと共に、職員のスキルアップを図る。

2 期 日

令和5年11月24日(金)

3 研修内容

(1) 自然素材集めの場所確認

事業当日に採取するかずらやヒイラギ等の自然素材の場所を確認し、実際に採取した。重ねて、参加者の安全面を考慮したルートになっているか確認した。



自然素材集め

(2) クリスマスリース・ミニクリスマスツリー作り

採取した自然素材を使って、作成の手順を確認した後、実際に作りを行った。それぞれの作業を職員自身が体験したことで、作成のポイントや支援の仕方、安全面など職員同士で共通理解するよい機会になった。



作成の様子

4 職員の感想

- 自分で取ってきた自然素材を使って作る作品は特別なものがあるので、当日参加者にその魅力を伝えたい。
- 自然素材のある場所について確認でき、自然素材の集める量についても確認することができた。
- 事前研修で自然素材集めのルートを確認し、実際に作ることで当日の流れを把握することができた。

5 成果と課題

- 実際に自然素材集めの場所に行くことで、素材のある場所やその数等について確認することができた。
- 実際にクリスマスリース・ミニクリスマスツリー作りを体験したことで、参加者への支援のポイントを確認する機会となった。
- 様々な種類のリースを作ったことで、参加者の完成イメージを膨らませることのできる見本ができた。
- 参加者が作品の完成をイメージしながら、自然素材収集ができるように、かずらの長さや自然素材の収集の量を事前に示す必要がある。



完成したミニクリスマスツリー

文化創作活動演習「正月かざり」作り

1 ねらい

令和6年度に実施予定の主催事業「正月飾り」に向けた研修として、材料の調達方法や、門松作りの手順、制作ポイント等の確認を行うと共に、職員のスキルアップを図る。

2 期日

令和5年12月20日（水）

3 研修内容

(1) 門松づくりの概要

令和6年度の主催事業実施に向けて、竹、ゆずり葉、畳表等の調達に関する引き継ぎ事項や方法、準備する数等について、確認を行った。



門松づくりを説明する様子

(2) 門松づくり

門松づくりの手順を確認した後、実際に作成した。

それぞれの作業を職員自身が体験したことで、場の設定、専用器具（シャキットくん）の使い方を始め、作成のポイントや支援の仕方、安全面などを共通理解することができた。



竹を切断する様子

4 職員の感想

- 縄の縛り方が難しかった。しっかりと説明ができるように練習しておきたい。
- 材料や用具の保管場所、実際の活動場所の確認ができた。令和6年度の主催事業に向けて、たくさんの竹を準備しなければならないことが分かった。
- 実際に作ったことで、どのような声かけや支援ができるか、イメージすることができた。

5 成果と課題

- それぞれに飾り方を工夫し、違いのある門松を作ることができた。
- 実際に門松づくりを体験したことで、参加者への支援のポイントを確認する機会となった。
- 天候不良によって、竹の提供をいただく竹林の整備を計画通り進めることが難しかった。様々な制約があるが、日程調整を行う必要である。更に、まとまった竹の量を確保するために、新たな調達先を見つける必要がある。



砂を入れ飾りを付けて完成

フィールドワーク「県立博物館・かごしま環境未来館」

1 ねらい

- (1) 県立博物館を訪問し、鹿児島県の自然や文化について見識を深め、プラネタリウムでは天体指導を行う際のポイントを学芸員に示唆していただき、本センターの受入指導で生かせるようにする機会とする。
- (2) 鹿児島市環境未来館を訪問し、環境（SDG s）について関心や理解を深め、本センターの受入・主催事業等で生かせるようにする機会とする。

2 期 日

令和6年2月7日（水）

3 研修内容

- (1) 県立博物館では、学芸主事の案内により、各階の展示物を見学した。また、バックヤードを見学させていただき、今後の研究のためにデータや展示物の保存の在り方について学ぶことができた。
- (2) かごしま環境未来館では、展示物を見学しながら、環境問題について考えることができた。見るだけでなく、動かしたり考えながらみんなで話し合ったりできる体験型の展示物があり、より具体的に考えることができた。

4 職員の感想

- 特別企画展及び各フロアについてコンセプトから展示内容について詳細に説明をしていただき、見学する際の視点も学ぶことができた。
- 環境問題について、学びが深められた。センター内での掲示物や、利用団体につどいで話をし、協力を得る事柄の内容として、参考にできることが多々あった。

5 成果と課題

- 県立博物館では、鹿児島県の自然や動植物について学び、見聞を広めるだけでなく、来所者が興味関心を抱く館内の展示物設営の在り方について考えるよい機会となった。
- かごしま環境未来館では、SDG sについて学び、今後の事業を企画立案する際のヒントを見つける機会となった。
- 来所者が、本センターの特色や実施している事業等を理解してもらえるような設営・広報の在り方について考えていく必要がある。
- SDG sについて、受入・主催事業の中にどのような活動を盛り込んでいくことができるか考えていく必要がある



県立博物館 2 階



県立博物館 3 階



かごしま環境未来館

5 スキルアップ研修を終えて

質の高い研修活動を提供できるよう、本年度も計画的に、全体研修、新任者研修、スキルアップ研修、主催事業事前研修等を重ね、職員の資質向上に努めた。

スキルアップ研修は、本センター職員が講師を担当して展開するため、割り当てられた研修内容が得意分野でなく、戸惑いや不安を抱く職員もいたが、それぞれの研修内容について自ら学びを深めながら資料を準備していく中で、不得意が得意に変わり、研修当日は自信をもって進めていた。このように、職員の学ぶ姿勢が相乗効果となり、回数を重ねるごとに、研修の質がレベルアップしていった。

スキルアップ研修を通しての職員の感想

- 計画的に研修が進められ、どの研修も学び直しや新たな学びとなっており良い。
- 設備を修繕したプログラム活動について学べる機会があれば良い。
- 一回ではなかなか身に付かないことがあるので、中頃に必要なプログラム活動や学び直しを設定してもよいのではないかと考える。



センター内の動植物



作陶

参考（主催事業報告）

- 1 たけのこホリデイ①②
- 2 ファミリーデイキャンプ春物語
- 3 ファミリーキャンプ夏物語
- 4 夏休み親子工作教室
- 5 夏の星空観望会
- 6 青少研観月会
- 7 青少研がやってきた
- 8 ファミリーキャンプ秋物語
- 9 年末年始を彩るウィンタークラフト
- 10 ファミリーキャンプ冬物語
- 11 青少研ほっとスペース

※ 社会教育セミナー（台風中止）

※ 冬の星空観望会（雨天中止）

【主催事業 1】

1 事業名 たけのこホリデイ①②

2 期 日 ① 令和5年4月9日(日)

② 令和5年4月15日(土)

3 参加者 ①12家族42人 ②22家族75人

4 事業内容

(1) 事業の趣旨

野外活動に興味・関心のある家族に、たけのこ掘りやたけのこを使った野外炊事活動、自然散策等の体験を通して、自然の恵みに感謝するとともに、家族の絆を深める機会とする。

(2) 事業の特色・企画のポイント

たけのこが地下茎でつながっていることや、見た目の違いから雄雌があるように言われていることなどについて説明をすることで、たけのこ掘りをしながら自然に興味・関心をもてるようにした。また、たけのこ掘り体験に加え、①では、掘ったタケノコを使って、炊き込みご飯と味噌汁作りの炊飯活動を行った。

5 日 程

①【4月9日(日)】

9:15～9:30	9:30～9:45	9:45～10:30	10:45～14:45	14:45～15:00
受 付	オリエンテーション	たけのこ掘り体験	たけのこを使った昼食作り ・炊き込みご飯と味噌汁	アンケート記入 解 散

②【4月15日(土)】

午前		午後	
10:30～10:45	10:45～11:45	13:30～13:45	13:45～14:45
受 付	たけのこ掘り体験 (オリエンテーション含む) ※アンケート記入, 解散	受 付	たけのこ掘り体験 (オリエンテーション含む) ※アンケート記入, 解散

6 参加者の感想

- 大きなたけのこをみんなで協力して掘れたので、楽しかったです。
- 初めてのたけのこ掘りで、たけのこの生え方や掘り方、大きさについて知れて驚いた。
- たけのこを探すのが楽しい。山に入るのもいい経験だった。結構頑張って協力して、とれたときの達成感があった。
- 子供がお味噌汁が好きではなかったが、「おいしい、おいしい。」とおかわりしていた。「たけのこおいしいね。」と食べていたときの顔が印象的だった。

7 成果と課題

〈成果〉

- 全体説明の中で、家族のできる範囲で協力することを大切にしてほしい旨を伝えた。その結果、「探す」、「掘る」、「片付ける」のそれぞれの過程で、家族ごとに工夫して協力をしていた。
- 掘ったたけのこを使った調理の活動を行った。その結果、普段あまり調理に携わることのない未就学児や低学年の参加者も、保護者と協力しながら調理の活動を楽しんでいた。

〈課題と対策〉

- 場所によってはたけのこがあまり生えてこないところもあった。次年度に向けて、伐採だけでなく、竹を増やすことも意識した環境整備を行っていく必要がある。



【実践事業2】

1 事業名 ファミリーデイキャンプ春物語

2 期 日 令和5年5月14日（日）

3 参加者 19家族68人

4 事業内容

(1) 事業の趣旨

野外活動に興味・関心のある家族が、豊かな自然の中で、キャンプなどの野外活動を体験し、自然の大切さを感じるとともに、家族の絆を深める機会とする

(2) 事業の特色・企画のポイント

薪割り体験や野外炊事を通して、家族で自然の豊かさや季節の移ろいを感じてもらうことが本事業の特色である。

初めてキャンプをする家族をターゲットとし、家族で過ごす自然体験と家族のふれあい、自然体験への動機付け（キャンプを始めるきっかけづくり）をねらいとして事業を組み立てた。

5 日程

9:30～10:00	10:00～10:15	10:15～11:00	11:00～14:00	14:00～15:15	15:15～15:30
受付	出合いのつどい オリエンテーション	【活動1】 「レッツ キャンプ」 ～キャンプを始めよう～ (キャンプ場案内 クイズde キャンプ、薪割り体験等)	【活動2】 「野外炊事」 ～おいしいランチをつくろう～ (カレーライスとデザートづくり)	【活動3】 「ネイチャーゲーム」 ～自然の中で遊ぼう～ (カモフラージュ)	アンケート記入 解散

6 参加者の感想

- 薪割り体験やたき火など、普段はなかなか子供に体験させることができない内容を、経験させることができて良かった。
- 野外炊事は楽しかったし、おいしかった。子供たちも「自分で作った」と感じており、喜んでいた。
- 自然の中で遊ぶ機会は今まであまりなかったが、家族で夢中になって遊ぶことができた。

7 成果と課題

〈成果〉

- 事業実施後の参加者へのアンケートでは、薪割り体験、野外炊事、ネイチャーゲーム全てにおいて満足度が高かった。また、「この事業に参加して、家族でキャンプをしてみようと思いましたか」の問いに対しては73.7%の家族が「とてもそう思った」26.3%の家族が「そう思った」と回答している。この事業に参加し、実際に野外活動体験をしてみたことで、キャンプを始めようという思いになっていることが分かる。

これらの結果から、本事業においてのねらいは十分に実現できたのではないかと考える。

- ネイチャーゲームでは、複数の遊ぶ道具を準備し、家族で自由に楽しんでもらえるようにした。また、大人も子供も一緒に取り組める内容とした。その結果、家族で協力することを楽しみながら活動している様子が見られた。
- 参加者への支援の在り方について、職員で事前に打ち合わせを実施した。その結果、支援が必要な参加者について職員が把握した上で接することができ、参加者が安心して活動に取り組むことにつながった。

〈課題と対策〉

- 具体的な野外活動場面を想定し、テント設営や、やってみたくなる野外調理を紹介するなど、野外体験活動への意欲付けとなる内容を更に工夫していく必要がある。

【主催事業3】

- 1 事業名 体験の風をおこそうin青少年研修センター ファミリーデイキャンプ夏物語
- 2 期 日 令和5年7月15日（土）
- 3 参加者 14家族48人



4 事業内容

(1) 事業の趣旨

センターの豊かな自然の中でテント設営や野外活動を体験することを通して、自然を体感し、家族の絆を深める機会とする。

(2) 事業の特色・企画のポイント

当日は、雨天プログラムでの実施となった。キャンプ初心者を対象とした事業のため、テントの立て方の説明を参加人数に応じて2グループに分けて行った。参加者の理解が進み、それぞれ協力し楽しみながら活動している様子が見られた。

野外炊事「我が家のカレーづくり」では、それぞれの家族で、食材の準備から当日の調理までを行う活動を設定した。参加者の目的意識が高まり、様々な創意工夫が見られ、充実した野外炊事となった。

「体験の風をおこそう」の活動として、「青少研館内クイズラリー」を行った。親子揃って館内を回りながら、クイズラリーを楽しむ様子が見られた。

5 日程

9:00 ～9:30	9:30 ～9:45	9:45 ～11:00	11:10 ～13:30	13:30 ～14:00	14:00 ～15:00	15:00 ～16:00	16:00 ～16:15
受 付	出会のつどい 朝エテション	【活動1】 テント設営	【活動2】 「野外炊事」	【活動3】 テントdeゆつくりタイム	【活動4】 テント撤収	【活動5】 遊びリンピック	アンケート記入 解 散
		(雨天時) 体育館で実施	わが家の カレーづくり キャンプ場炊飯棟	(雨天時) 体育館で実施			

6 参加者の感想

- 初めてのテント設営だったが、スタッフの方の指導のおかげで、簡単に立てることができた。
- 子どもたちが野菜を切ったり料理をしたりすることで、苦手な野菜を食べることができるようになり、自信につなげることができた。

7 成果と課題

〈成果〉

- 本事業に参加したことで、今後家族でキャンプをしてみたいと考える家族が多く見られた。中には、キャンプ道具の価格が知りたい等の要望があった。
- 「我が家のカレーづくり」では、家庭ごとにオリジナリティーが見られ、家族間交流の一助にもなった。

〈課題と対策〉

- 「青少研クイズラリー」は、小学生以上を対象としていたため、幼児には難しかったとの感想が聞かれた。今後、見直しをしたり、表記を分かりやすくしたりする必要がある。
- ご飯炊き、カレーづくりに飯ごうを用いたが、煮え具合の見極めが難しかったとの声が聞かれたので、今後よりよい方法を考えていきたい。

【主催事業 4】

- 1 事業名 夏休み親子工作教室
- 2 期 日 令和5年7月23日（土）
- 3 参加者 15家族 38人
- 4 事業内容

(1) 事業の趣旨

夏の思い出に残るような作品を制作することで、家族で協力して制作する楽しさや作品を仕上げる達成感・成就感を味わい、家族のふれ合いを深める。

(2) 事業の特色・企画のポイント

普段あまり使うことのない電動工具（電動糸鋸等）を使って、1枚の木材から部品を切り出し、組み合わせて宝箱（収納箱）を作る活動を設定した。親子で一緒になって話し、考え、工夫するなど、様々な場面で親子が協力して作業をすることができるようにした。

5 日 程

午 前		午 後	
9:00～9:15	9:15～12:00	13:00～13:15	13:15～16:00
受 付	日程・活動内容の説明 宝箱（収納箱）制作	受 付	日程・活動内容の説明 宝箱（収納箱）制作

6 参加者の感想

- 作り方だけではなく、木の説明についても子どもに分かりやすく、実物を見ることができて勉強にもなりました。
- 少ない人数で、分からないところはすぐに聞くことができ、安心して活動することができました。楽しくて笑ってばかりでした。ありがとうございました。
- できなさそうなところは、職員の方がお手伝いしてくださったので良かったです。私自身、子どもと一緒に箱を作り上げられたので、とても満足です。
親と子のふれあい（助け合い）を学ぶことができました。

7 成果と課題

〈成果〉

- 木材の種類や特色、制作過程の注意点等、基礎的な説明の時間を設けた。その結果、加工する木材について関心をもたせることができ、意欲をもって制作活動に取り組むことができた。
- 職員の試作品を、見本として展示した。その結果、作品に対するイメージの共有ができ、完成後の活用方法を話し合うなど、見通しをもってオリジナル作品を完成させることができた。
- 2mの木材を切断する体験を組み入れた。その結果、1枚の木材から箱の材料を切り出し、接続していく過程を通して、制作活動の達成感を味わいつつ、家族のふれあいも深められた。

〈課題と対策〉

- 申込み状況が午前に集中するため、午後の参加者をより多く獲得するための、効果的な広報活動を行っていく必要がある。
- 親子の協力と絆を深める機会とするための工作教室として、制作する物の難易度や個数等を十分検討し、魅力的な制作物を模索していく必要がある。



【主催事業5】

1 事業名 夏の星空観望会～ペルセウス座流星群と夏の星座たち～

2 期 日 令和5年8月13日（日）

3 参加者 163人

4 事業内容

(1) 事業の趣旨

夏の星空を観望することを通して、宇宙の雄大さにふれるとともに、夏の星座や天体に対する興味・関心を高める機会とする。

(2) 事業の特色・企画のポイント

ペルセウス座流星群の極大日に合わせた日程で、流星群の観望を主活動に据えた。流星や星空の観望をより楽しめるよう、解説の内容や時間設定、場の設定などを工夫した。

5 日 程

19:00～19:30	19:30～20:45	20:45～21:00
受 付	星の観望 ・ペルセウス座流星群の説明 ・夏の星座等の説明	アンケート記入 解 散

6 参加者の感想

- 流れ星が流れるまで、星座を探して楽しめるような工夫やクイズもあり、子どもが飽きずに聞くことができた。星座を習ったばかりの娘には、興味深い話ばかりだったようで、「お話面白かったね」と話していた。
- 家族みんなで寝転がり、星空を見上げることで、色々な話をしながらリラックスできた。とても良い時間だった。
- 解説でお話いただいた星座を探したり、星を探したり、飽きずに星空を見つめることができました。流れ星も見ることができて、大満足です。

7 成果と課題

〈成果〉

- 説明する星や参加者の動線などを考慮した場の設定を行った。その結果、夏の大三角や流星群の放射点を示すことができた。
- 幼児や低学年の児童でも天体に興味・関心をもてるように、説明の内容や方法を工夫した。その結果、天体や星座に関するクイズでは、家族で一緒に考える姿が見られた。
- 大勢の来場を見越して、後全勤務者を増員した。その結果、駐車場内や会場への誘導に必要な人員配置をすることができ、事故やトラブル等もなく、参加者が安全に過ごすことができた。

〈課題と対策〉

- その年の気象条件（月齢等）や当日の天候等により参加者数が変動する事業である。大勢の参加者にも対応できるような職員配置や準備をしておく必要がある。
- 予報が晴れでも、観望の時間に雲があり、星を見ることができない場合がある。曇天（星が見えない）時の対応まで考えておく必要がある。



【主催事業6】

- 1 事業名 **青少研観月会**
- 2 期日 令和5年9月29日（金）
- 3 参加者 152人
- 4 事業内容



(1) 事業の趣旨

中秋の名月を観望することを通して、宇宙の雄大さにふれ、天体に対する興味・関心を高めるとともに、初秋の日本文化について知る機会とする。

(2) 事業の特色・企画のポイント

中秋の名月（十五夜）に合わせた日に実施し、満月を眺めることを主な活動とした。お月見の由来についてクイズ形式で学びの場を設定するとともに、箏とフルートによる「お月見コンサート」を計画し、美しい音色に包まれながら穏やかな雰囲気の中で満月を眺めることができるようにした。更に、月への興味・関心を高めるために、フィールドスコープによる月の観望を取り入れた。

5 日程

19:00～19:30	19:30～20:50	21:00
受付	・オープニング ・月や天体の話・クイズ ・お月見コンサート（箏とフルートの演奏） ・月の観望（フィールドスコープ体験）	アンケート 記入 解散



6 参加者の感想

- 地域のお月見行事がないので、大変良い機会になった。来年もぜひまた来たい。
- フルートと箏の音色が組み合わさってとてもよかった。また来たいと思った。
- 満月をフィールドスコープで見れて、とても美しかったです。
- 旧暦の話、十五夜の由来など、お話がわかりやすく、小学生、中学生の娘と大変興味深く聞かせていただきました。

7 成果と課題

〈成果〉

- 会場をつどいの広場にして実施した。参加者の動きが少なく、ゆとりある活動を展開することができた。
- 交歓ホール前に特設ステージを設け、箏とフルートによるお月見コンサートを実施した。素晴らしい音色でお月見の雰囲気が高まり、感動的な観月会となった。
- フィールドスコープによる満月の観望を行った。月の模様やクレーターを大きく見ることができ、参加者に月の美しさを実感してもらうことができた。

〈課題と対策〉

- 電源確保のために、特設ステージをつどいの広場の北側にした。しかし、月を見ながら演奏を聴きにくかったので、ステージを東側にできないか検討する必要がある。
- 参加者から、思いのほか寒かったとの感想があった。事前にInstagramやホームページ等で、防寒対策や気温の状況等を知らせる手立てが必要だった。

【実践事業7】

1 事業名 青少研がやってきたin清和小

2 期 日 令和5年10月14日（土）

3 参加者 694人

4 事業内容

(1) 事業の趣旨

青少年研修センターの活動プログラムや創作体験，作品展示，施設紹介・主催事業のパネル展示等を通して，県民に本所の特色や活動内容等を紹介するとともに，施設のより一層の利用促進を図る。

(2) 事業の特色・企画のポイント

青少年研修センター以外の場所で事業を行い，参加者にクラフト活動を実際に体験してもらったり，パネル展示を見てもらったりすることによって，本所の特色や良さを知ってもらい，施設の利用促進につなげることが本事業の特色である。

今回の事業では，対象が小学生とその保護者であったため，遊び体験活動も取り入れ楽しめるものとした。

5 日 程

時 間	内 容
13:30～16:00	○ 創作活動 年輪ネックレス，木の実・木の枝ストラップ ○ 遊び体験活動 どんぐり皿移し，ストラックアウト ○ 施設紹介・主催事業のパネル展示

6 参加者の感想

- 初めて参加した。子供にも好評で毎年参加したいと思った。
- 青少年研修センターに行くのは距離があり大変だが，小学校に来ていただくととてもありがたい。子供たちが生き生きとしていた。
- ストラップ作りがとても楽しかった。

7 成果と課題

〈成果〉

- 創作活動だけではなく，遊び体験活動も行えるようにした。その結果，遊び体験に何度も挑戦する参加者がいるなど，楽しんでチャレンジする姿が見られた。
- 施設紹介や主催事業のパネル展示を行った。その結果，施設について知ってもらう機会となった。

〈課題と対策〉

- 学校との連携は，多くの方にセンターを知っていただく機会ともなる。今後とも連携を計画的に進めていく必要がある。
- 学校以外にも広報の場を考えていきたい。



【主催事業8】

1 事業名 体験の風を起こそうin青少年研修センター ファミリーキャンプ秋物語

2 期 日 令和5年10月21日（土）～22日（日）

3 参加者 18家族64人

4 事業内容

(1) 事業の趣旨

野外活動に興味・関心のある家族が、豊かな自然の中で、キャンプなどの野外活動を体験し、自然の大切さを感じるとともに、家族の絆を深める機会とする。

(2) 事業の特色・企画のポイント

キャンプなどの野外活動に初めて取り組む家族を対象とし、屋外での活動を楽しむ際の留意点やマナーなどを知り、季節を味わう自然体験活動を通して野外活動に親しむ事業となっている。

また、家族構成や子供の発達段階に応じて活動を選択できるようにしたり、協働により達成できる活動を意図的に計画したりすることにより、家族で達成感・成就感を共有し、野外活動への興味・関心・意欲を高め、本事業を経て次は自ら野外活動に取り組もうとする意欲を高めることができるようにした。

5 日 程

(1) 1日目

13:15	13:45～14:15	14:15～16:15	16:15～19:45	19:45～21:45	21:45
受付	出合いのつどい オリエンテーション	【活動1】 「テント設営」 雨天時:東ピロティ 荒天時:体育館	【活動2】 「野外炊事」 家族で作ろう 「カオマンガイ」	【活動3】 「団らんタイム」 焚き火・天体観望等 ※入浴タイム	就寝

(2) 2日目

6:30	7:00～9:30	9:30～10:30	10:30～11:30	11:30～11:45
起床 ラジオ体操	【活動4】 「野外炊事」 家族で作ろう「簡単ト ルティーヤサンド」	【活動5】 「レクリエーション」 遊びリンピック	【活動6】 「テント撤収」	アンケート 記入後解散

6 参加者の感想

- お風呂の帰り道で星を堪能することができて、皆の焚き火を眺めながらお茶をいただき、流れるように楽しいひとときをすごすことができました。
- 望遠鏡で木星や土星を眺めることで、子どもたちも喜んでいました。大人は、ゆっくり焚き火を眺めることができました。
- 皆さん一生懸命で、ホスピタリティあふれる笑顔で接してくださり、最後まで楽しんでもらうことに尽力されている姿、素晴らしかったです。

7 成果と課題

〈成果〉

- 活動場所と活動時間配分を、参加者の動線を意識した配置にすることにより、参加者の安全を確保しながらゆとりをもった活動にすることができた。
- 野外炊事については、新しいメニューを取り入れることにより職員のスキルアップを図ると共に参加者の実態に応じることができた。
- 団らんタイムについては、天体望遠鏡を活用した天体観望や焚き火体験等を選択制にすることにより、参加者の実態に応じた活動にすることができたと共に、家族の絆を深めたり家族間の交流を図ったりする機会を提供することができた。

〈課題と対策〉

- 本センターは標高が高く、予想より気温が低く感じた参加者がいたため、防寒対策の周知方法や実施時期の検討が必要である。
- 家族の実態に応じることで活動を充実させることができた一方で、家族間の交流の機会があまりなかったため、家族間の交流を意図的に取り入れていく必要がある。

【主催事業9】

1 事業名 年末年始を彩るウインタークラフト～自然素材で作るクリスマスリース・ミニクリスマスツリー～

2 期 日 令和5年12月10日（日）

3 参加者 33家族 97人

4 事業内容

(1) 事業の趣旨

木の葉や木の実などの自然素材を使ったクリスマスリース・ミニクリスマスツリーづくりに取り組むことを通して、自然の豊かさや素晴らしさ、季節感を味わうとともに、家族で協力し、絆を深める機会とする。

(2) 事業の特色・企画のポイント

本センター内を家族で散策し、自然素材を採取することで、自然の豊かさや季節の移ろいを感じてもらうことが本事業の特色である。

企画のポイントとして、より参加希望者が選択しやすいように、午前、午後ともに2つの活動を取り入れた。また、クリスマスリースだけでなく、新たな試みとして、ダイオウマツを使ったミニクリスマスツリー作りを企画した。

5 日 程

内 容	受付	オリエンテーション	自然素材集め ※ 雨天中止	クリスマスリース・ミニクリスマスツリー アンケート記入、解散
午前の部	9:00～9:15	9:15～9:30	9:30～10:20	10:20～11:45
午後の部	13:00～13:15	13:15～13:30	13:30～14:20	14:20～15:45

6 参加者の感想

- 森の中に入って自分たちで材料を採ることが楽しかった。
- 子どもの自由な発想に、保護者も童心にかえることができた。
- 久しぶりに参加し、家族みんなで楽しいひとときが過ごせた。



〈自然素材収集〉



〈ウインタークラフト制作〉



〈記念撮影〉

7 成果と課題

〈成果〉

- 例年実施するクリスマスリースに加え、ダイオウマツを使ったミニクリスマスツリーをプログラムに取り入れた。その結果、本センターにある自然素材の特徴を生かした、創意工夫あふれる作品が多く見られ、参加者に好評だった。
- 職員が研修で制作した作品を見本として展示したり、自然素材そのものを実際に見せたりし、説明を簡潔にすることで、家族で制作に取り組む時間を多く確保した。その結果、家族で相談しながら楽しく制作する姿が見られた。

〈課題と対策〉

- 募集定員に対して、制作内容や時間帯によっては定員に満たない時間帯があった。次年度に向けて、広報の在り方（見る方の心に届くチラシの構成やチラシ配布の範囲等）を検討していく必要がある。
- 流行性の感染症が流行る時期の事業で、参加者決定後のキャンセルが多くあった。キャンセルを想定した定員（キャンセル待ちを含む。）の設定を検討する必要がある。

【主催事業10】

1 事業名 ファミリーキャンプ冬物語

2 期 日 令和6年1月27日（土）～28日（日）

3 参加者 10家族25人

4 事業内容

(1) 事業の趣旨

野外活動に興味・関心のある家族が、冬の厳しい自然の中で、テント設営などの野外活動を体験し、自然の大切さを感じるとともに、家族や参加者同士の絆を深める機会とする。

(2) 事業の特色・企画のポイント

冬の厳しい寒さを体感する中で、焚き火や料理の暖かさ、家族のぬくもりや愛情を心身共に感じるとともに、家族間や参加者同士で語り合う場や、協力して活動する場面を意図的に計画することで、互いの絆や交流を深められる事業となっている。また、キャンプ活動に関わる体験を通して、様々な知識や技術の他、屋外での活動を楽しむ際のマナーを学び、体験活動についての興味・関心をさらに高め、自主的に野外活動に取り組もうとする意欲も高められるようにした。

5 日程

(1) 1日目

13:00	13:30～14:00	14:00～16:00	16:00～19:30	19:30～21:00	21:00
受付	出合いのつどい オリエンテーション	【活動1】 「テント設営」 雨天時:体育館	【活動2】 「野外炊事」 我が家のキャンプ鍋	【活動3】 「団らんタイム」 星空観望 チェアリング フリータイム	就寝

(2) 2日目

7:00	7:30～9:00	9:00～10:30	10:30～11:45	11:45～12:00
起床 散策(自由)	【活動4】 「野外炊事」 カートンドック ポトフ	【活動5】 「焼きいも体験」 「遊び体験」	【活動6】 「テント撤収」	アンケート 記入後解散

6 参加者の感想

- テント設営や野外炊事では、子どもが積極的に手伝ってくれた姿に、成長を感じられて良かったです。
- 子どもと二人でゆっくりする時間は、普段あまり取れないので、貴重な時間でした。
- みなさんの優しい心遣い、準備のおかげで、とても楽しく大満足の2日間でした。

7 成果と課題

〈成果〉

- ふれあい広場を拠点とした、オートキャンプ形式の会場を設営することにより、参加者の荷物移動の負担軽減及び安全な動線を確保できた。また、雨天時の際に迅速に対応できる体制を整えることができた。
- 家族や参加者同士の絆や交流を深められる場面を、体験活動の中に意図的に盛り込んだことにより、積極的な参加者同士の協力体制や情報交換によるふれあい、家族の温かさや所属感を感じられる機会を提供することができた。

〈課題と対策〉

- 野外炊事で調理する食事内容や提供する食材について、参加者のニーズも踏まえながら検討し、職員研修等でスキルアップを図っていく必要がある。
- より魅力的で、参加者増に結び付けられる事業にするために、体験活動内容の見直しや、実施時期の検討及び積極的・効果的な広報活動に努めていく必要がある。



【主催事業11】

1 事業名 青少研ほっとスペース

2 期 日 毎週水曜日（通年）

【令和5年度の実績】

6月28日 7月12日 11月15日

3 参加者 2家族6人

4 事業内容



(1) 事業の趣旨

不登校及び不登校傾向の児童生徒を対象に、自然豊かで開放的な環境を最大限に生かし、気分転換や体を動かす場を提供しながら、体験活動や人との関わりを通して、自己を見つける機会を提供することを目的とする。

(2) 事業の特色・企画のポイント

不登校及び不登校傾向の児童生徒に家から出て活動する機会を提供し、自分で考えた活動に取り組ませることで、気力・体力の充実を図るとともに、自己肯定感を実感できる。また、他の参加者や職員との関わりの中で、自分のよさに気付き、他者とのつながりを感じる機会を通して、自己有用感を高めるようにした。

5 日 程（例）

時 間	活 動 内 容
10:00 ～ 10:05	入所・受付（検温，健康観察，活動内容の説明）
10:05 ～ 10:15	活動内容の相談・確認
10:15 ～ 11:00	活動1「かえでの園コース散策」
11:00 ～ 11:50	活動2「ボール遊び，バツタ捕獲」（ドッジボール，バスケット，サッカー）
11:50 ～ 12:00	活動の振り返り，次回の活動内容検討，退所

6 参加者の様子（11月15日の記録から）

どんな活動をしたいかを尋ねると、ボールを使った遊びがやりたいと答えたので、散歩道のコースを廻った後、ボール遊びをすることに決めた。さくらの園の斜面の上に立ち、桜島や市街地を気持ちよさそうに眺めていた。しばらくすると、斜面にお尻をつけ何回か滑り降りた。次第に慣れてくると斜面に寝転がって、全身を使って楽しそうに滑っていた。バスケット，サッカーなどをして楽しんでいる途中から、網を持ちバツタ捕獲に夢中になった。



7 成果と課題

〈成果〉

- 自然豊かな環境を有効に活用し、参加者の興味・関心のあることから、自発的な活動を展開していくことで、達成感・成就感を味わわせながら少しずつ自己肯定感・自己有用感を高めることができた。また、保護者も子どもとの接し方について振り返る機会となった。

〈課題と対策〉

- 学校及び関係機関との連携を密にしながら、より効果的な支援ができるよう努めていく。

おわりに

美しい春の訪れ

春の訪れは、さりげなく、しかし確実に、私たちの周りの世界を変化させていきます。まず目に映るのは、冬の終わりを告げるかのような、わずかに温かみを帯び始めた日差しです。長い冬の眠りから目覚めた大地は、ふたたび生命の息吹で満たされようとしています。



裸木には小さな芽がほころび始め、やがてそれらは若葉へと成長し、木々を新緑で覆っていきます。この季節独特の生まれ変わりのシンボルとも言える若葉の緑は、見る者の心にも新鮮な希望を呼び覚ます力があります。

人々の暮らしにも、春は新たな活力をもたらします。新学期が始まり、新しい出会いや再会を喜ぶ声があちこちで聞かれます。また、この時期には新たな目標や抱負を立て、心新たにスタートを切る人も少なくありません。春は、自然の中で起こる見えない力に導かれるように、私たち一人ひとりの心にも、変化と成長のための種をまく季節です。

この美しい季節がもたらす無限の可能性と共に、新たな一步を踏み出す勇気をもらい、心満たされる日々を迎えることになります。

研究同人

令和4年度

令和5年度

所 長
次長 兼総務課長
総務課 総務課長
" 総務係長
" 主 事
" 主 査
研修課 研修課長
" 研修主任
" 研修主任
" 研修主任
" 研修主事
" 研修主事
" 研修主事
" 研修主事
" 研修主事
" 研修主事
" 研修主事
社会教育指導員

伊 藤 太
大 園 祥 子
—
柳 田 昌 紀
有 川 剛 弘
久 保 詩 帆
口ノ町 亨
中 西 翼
中 熊 一 仁
西 留 栄 俊
中 村 幸一 郎
林 直 樹
駿 河 純
仲 谷 仁 美
下 別 府 明 伸
田 下 淳
—
桜 井 万 里

福 岡 幸 彦
—
小 牧 智 子
柳 田 昌 紀
有 川 剛 弘
久 保 詩 帆
中 尾 奨
中 村 幸一 郎
西 留 栄 俊
中 西 翼
稲 田 浩 二
林 直 樹
野 村 伸 吾
仲 谷 仁 美
大 下 本 洋 平
東 泰 宏
田 下 淳
桜 井 万 里